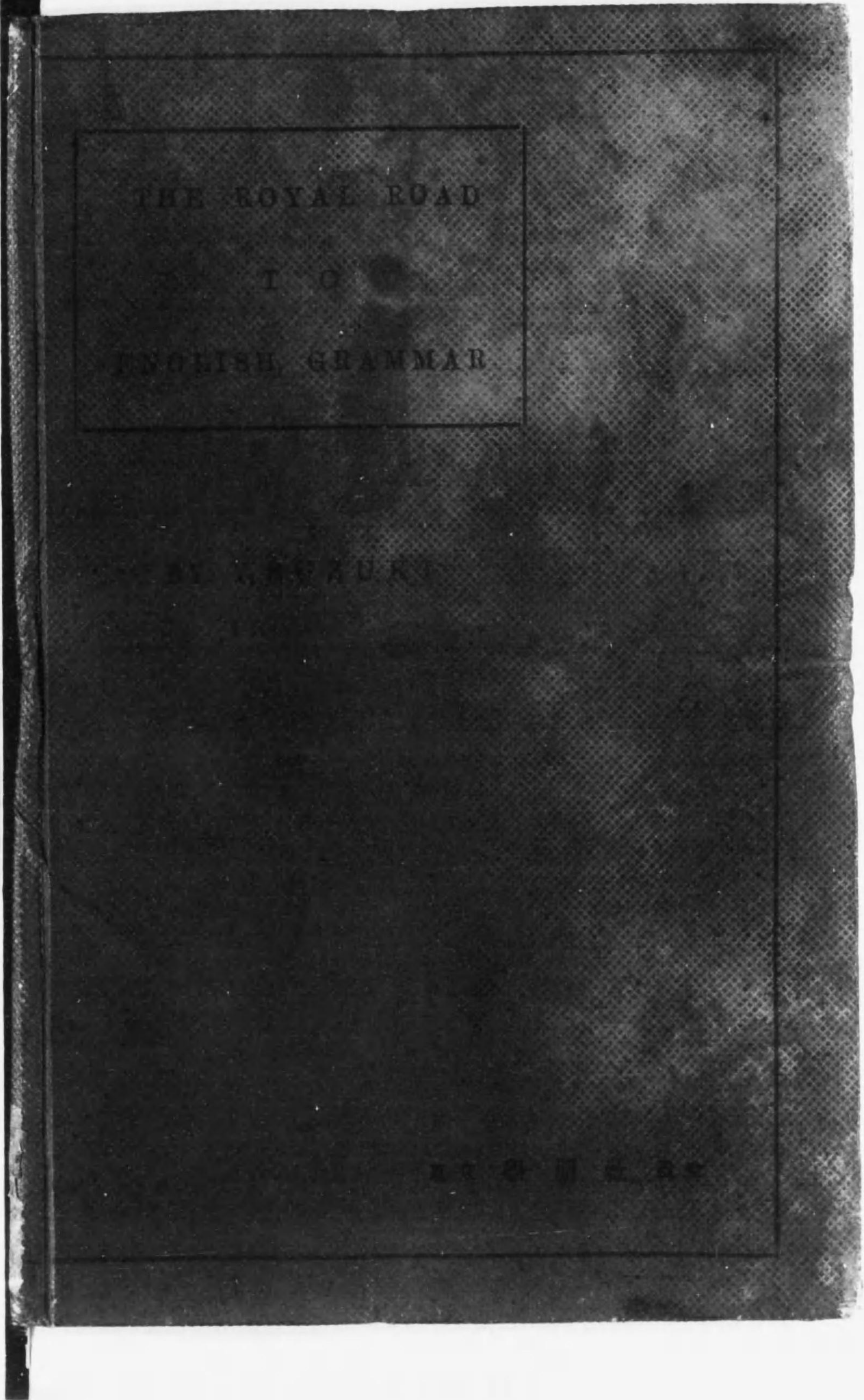


始



THE ROYAL ROAD

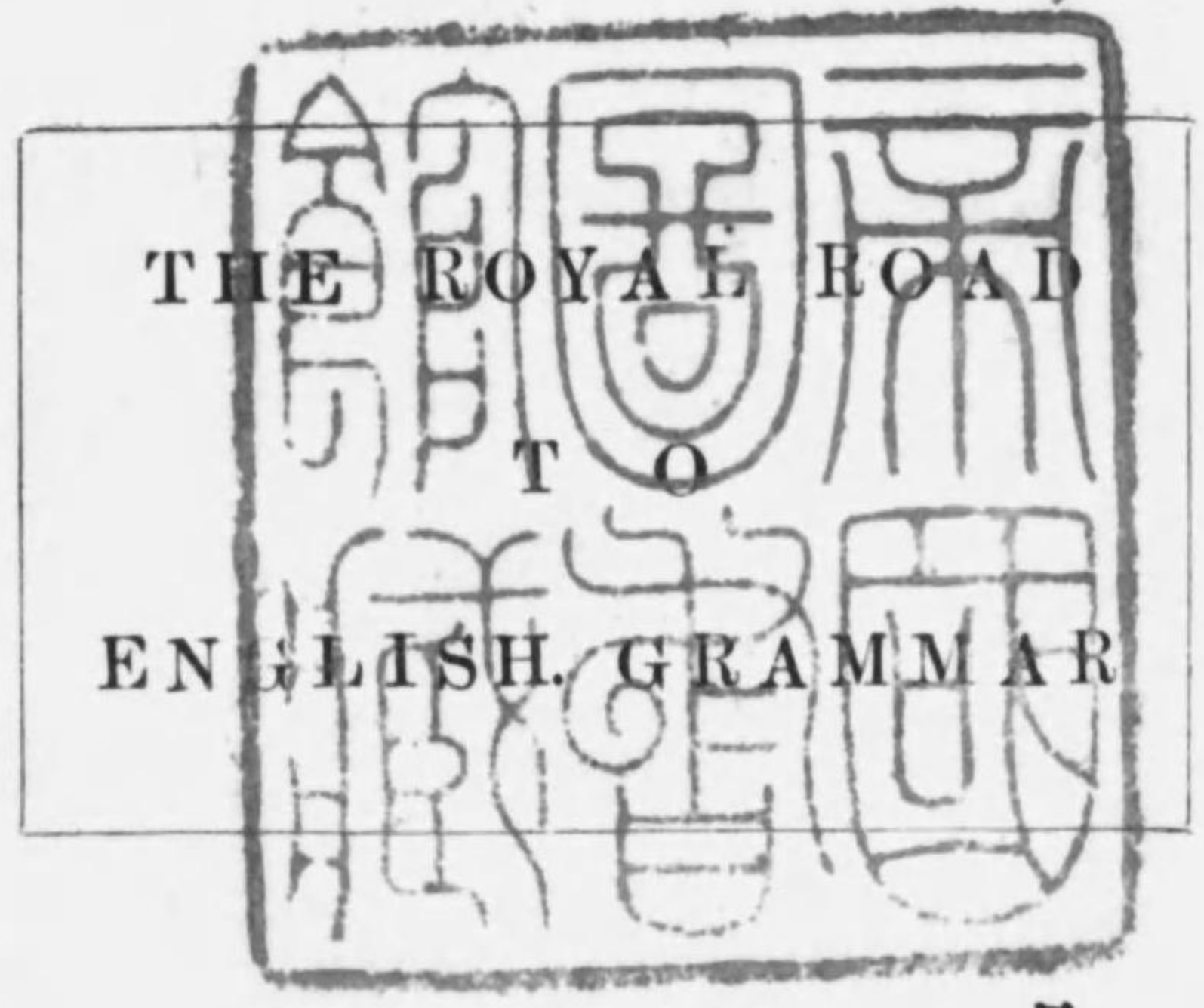
T O

ENGLISH GRAMMAR

BY W. SUZUKI

東京學朋社發行

特263
32



日進英語學校講師
鈴木芳松 著

初等英文法の王道

東京學朋社發兌



英文法に就て

文法といふものは、如何なる國語の場合でも、余り興味のあるものでない、従つて容易に手を出す氣になれない。だがさればといつて全然打棄てゝも置かれない、厄介な代物である。

其文法に關する講義書は坊間百を以て數ふるほどあるが、或は簡に過ぎて要を得ず、或は密に過ぎて煩雜に陥り、學習者をして徒らに五里霧中に彷徨せしむる底のものが多い。殊に初等者を對象とした文法書で適當と思はれるものの少いのは實に遺憾である。著者はかうした欠陥を痛感し來つた一人であるが、今回少閑を得たので、多年英語初歩教授に當つた體驗を基礎として本書を著し江湖に送り出す事となつた。別に新機軸を出したの何のといふ譯ではない、只初學者に分り易いものを書いた、否書いたつもりといふ丈けの事である。讀んで見て「なるほど分り易い」と思ふ人があつて呉れゝばそれで著者は満足である。

著 者

昭和九年四月

目次

	頁
品詞	1
文章	4
文の要素	4
目的語のある述動詞	6
補語のある述動詞	7
句と節	10
文の種類	16
直接叙法と間接叙法	20
名詞	22
1. 普通名詞	22
2. 複数の作り方	23
3. 固有名詞	26
4. 物質名詞	27
5. 抽象名詞	29
6. 格	31
7. 集合名詞	35
冠詞	37
不定冠詞の他の用法	38
定冠詞の他の用法	39
代名詞	41

1. 人稱代名詞	41
2. 疑問代名詞	43
3. 關係代名詞	45
4. 指示代名詞	48
形容詞	49
1. 代名形容詞	49
2. 限定形容詞	50
3. 數量形容詞	51
形容詞の用法	53
比較	54
比較の作り方	55
數 詞	57
動 詞	60
構文第一	60
構文第二	61
構文第三	62
構文第四	62
構文第五	64
構文第六	65
動詞の變化	66
主なる不規則動詞	67

基本時形	71
現在形の作り方	72
過去形の作り方	73
未來形の作り方	74
完了時形	75
進行形	79
態	82
動詞變形	85
助動詞	90
副 詞	101
1. 單純副詞	101
2. 疑問副詞	103
3. 關係副詞	103
副詞の比較	105
副詞の普通の形	105
形容詞と同形の副詞	106
注意すべき副詞	106
接續詞	110
1. 等位接續詞	110
2. 從屬接續詞	111
前置詞	114

主なる前置詞	115
誤り易き前置詞	117
間投詞	120
練習篇	122
名詞	122
代名詞	125
形容詞	130
動詞	132
副詞	136
接續詞	138
前置詞	138
間投詞	140
文章	141
複數に就て	146
性	149
性に關する注意	150
獨立所有形	152
再歸代名詞	154
附屬疑問詞	154
不定疑問代名詞	158
關係代名詞	159
限定的及追叙的用法	159

關係代名詞の省略	161
形容詞の位置	163
倍數詞	165
現在に就て	166
注意すべき形容詞代名詞	168
Comma	179
Colon	182
Period	182
Dash	184
Apotsophi	184
Hyphen	184
Quotation Marks	184

PARTS OF SPEECH

(品詞)

人體の各部が、頭は頭、手は手、足は足といふ様に、それぞれ専門の役目を果してゐると同様に、語なるものも、一口に語とは云ふものの、皆それぞれ働きが異つてゐる。語をその役目の種類によつて分類したものが品詞である。英語では品詞を次の様に九つに分けてゐる。

Noun (名詞)——物の名、人の名、動作の名、性質の名、荷も名と名のつくものは皆名詞である。

boy (少年) desk (机) egg (卵)
water (水) kindness (親切) fruit (果物)

Article (冠詞) ——これは名詞の頭に冠するもので a, an, the の三つである。

Proroun (代名詞)——名詞の代りに用ひる語である。「鈴木」といふ場合に「君」と云つたり、「机」といふ場合に「それ」と呼んだりする様なもの。

you (汝) I (私) he (彼)
she (彼の女) it (それ) they (彼等)

Verb (動詞) ——これは、主格の有様や動作を説明

するには必要なく可らざるもので、どんな文章にも動詞のない文章は一つもない。人體に譬へれば諸種の大切な内臓を持つてゐる胴の様なものである。それだけに凡ての品詞の中でも動詞が一番六かしいのである。

walk (歩く) stand (立) eat (食べる)
sleep (眠る) know (知る) feel (感ずる)

Adjective (形容詞)—これは名詞代名詞に就てそれを形容する語である。吾々の着物みた様なもの。

fine (美しい) white (白い) cold (寒い)
honest (正直な) big (大きい) high (高い)

Adverb (副詞)—これは形容詞、動詞、及び自分と同じ副詞を形容するものである。

fast (速かに) kindly (親切に) very (非常に)
sadly (悲しく) gladly (喜んで) easily (容易に)

Conjunction (接續詞)—これは文章の部分部分を結び付ける役目のもの。吾々の帶革、ズボンつり、羽織の紐の様なもの。

and (そして) but (併し) so (それ故)

Preposition (前置詞)—これは名詞又は代名詞の前に置いて、それらと他の語との關係を示すものである。

on (…の上に) in (…の中に) to (…へ)
of (…の) from (…から)

Interjection (挿投詞)—これは喜怒哀樂すべて人の感情を表はす語で、其の置場所は一定してゐない。文章の何處へでも投げ入れるから、かうした名稱が附いてゐるのである。

人によつては品詞を八つに分けて、「八品詞」としてゐるものもあるが、これは「冠詞」を獨立させずに形容詞の中へ入れて數へるからである。併し「冠詞」といふものは中々種々の働きのあるもの故、形容詞の中へ同居させるのは惜しい。本書ではこれを獨立させて講義する事にした。合せて都合九つ、これを英語で *Nine Parts of Speech* (九品詞) といふのである。さて、これから細かい説明に入るとしよう。

SENTENCE

(文章)

A, B, C, D, ……といふ Letter(字)が集まつて, “dog;” “cat” などいふ Word(語)が出来, 此等の語が集まつて Sentence(文章)が出来るのであるが, 單に語が集まつただけでは文章にはならぬ。例へば

Father mother Asakusa go up Junikai

では只語の行列に過ぎない, 何の意味も表はれない。
併しこれを

Father and mother went to Asakusa, and went up the Junikai.

とすれば, 「父と母が浅草へ行つて十二階へ上がった」といふ文章になるのである。斯様に, 或る題目に就て語を適當に結び合せ一つの纏まつた意義を表はすものが「文章」なのである。そして英語では Sentenceの終りには必ず Period(段落點)を附けなければならぬ。これは十分承知の上でもいざとなると忘れ勝ちであるからよくよく注意しなければならぬ。

文の要素

Subject(主部)—Predicate(述部)

人體が頭と胴との二つの部分から成立つて居る様に, 文もまた二つの主要なる部分から成立つて居る。頭部に相當するものが Subject(主部)で, これは話の題目になり, その Subjectに關して「……である」と述べる言葉が Predicate(述部)で, これは胴に相當するものである。主部には名詞代名詞を, 述部には主要語として動詞が必要である。

1. The birds sing.

=鳥さもが歌ふ。

2. The dew lies on the grass.

=露が草に下りる。

3. The trees are fresh and green.

=樹々は生々として青い。

4. It is the best season of all the year.

=今は一年中で一番よい時候だ。

上の例文に就て説明すれば, (1)の“The birds”が主部で, “sing”は述部, (2)の“The dew”が主部で, “lies on the grass”が述部, (3)の“The trees”が主語で, “fresh and green”は述部, (4)の“It”が主部で, “is the best season of all the year”が述部である。ところで諸君も氣が附かれた事であらうが 同

じ主部でも、(4) の “It” の様に只一つの語の場合の主部もあるし、其の他の主部の様に数語から立つてゐるものもある。また同じ述部でも、(1) の “sing” の様に簡単なものもあれば、その他の様に複雑なものもある。主部が複雑である場合その中の主要語（名詞又は代名詞）を Subject-word（主語）といふ、上例中の “birds” “dew;” “trees” などがそれである。また述部が複雑である場合、その中の主要語（動詞）を Predicate-Verb（述動詞）といふ、上例中の “lies;” “are;” “is” などがそれである。

目的語のある述動詞

- (a) The lion roared.
= 獅子が吼えた。
- (b) The lion killed.
= 獅子が殺した。

上例 (a) と (b) を比較してみると、(a) は短文ながらも一つの纏まつた意味を表はしてゐるが、(b) に於ては述動詞 “killed” の働きの目的となる物を述べてない爲めに意味が不完全なのである。「獅子が殺した」とばかりでは、何を殺したのか分らない。これを、

The lion killed a mouse.

= 獅子が鼠を殺した。

とすれば一貫した意味を表はすことが出来る。斯様に “a mouse” の様に、動詞に伴つて其の働きを受ける物を表はす語を、其の動詞の Object（目的）といふのである。そして目的語になるものは普通、名詞又は代名詞である。目的語を必要とする動詞を Transitive Verb（他動詞）、上例 “roar” の如くそれを不必要とするものを Intransitive Verb（自動詞）といふ。動詞を見たら、これは自動詞か他動詞かといふ事を必ず考へねばならぬ。辭書などには Transitive の略語として *vt.* を、Intransitive の略語として *vi.* を用ひてある。

補語のある述動詞

- (a) I am.
= 私は である
- (b) He became.
= 彼は になつた

上例 (a) (b) の文は兩方共完全でない。これでは「私」が何であるのか、「彼」が何になつたのか、とんと分らない。併し假りに、次の様な語を夫々添へてみたら如何であらう。

I am a student.
 (a) { =私は生徒である
 I am rich.
 =私は金持である。

He became a soldier.
 (b) { =彼は軍人になつた。
 He became poor.
 =彼は貧乏になつた。

かうすれば、皆意義の纏まつた完全なものになる。然らば今補つた“student,” “rich,” “soldier,” “poor”などいふものは文法上一體如何いふものであらう。此等は目的語でない事は確かである、何故ならば、“am”とか“become”は「……である」「……になる」の意の自動詞で、自動詞である以上は目的語の必要がないのだから。では何だらう？此等は動詞の意義の不足を補つて主部の状態を表はし、或は主部と同一物である事を示してゐるのである。斯様に動詞の意義を完全ならしめんが爲めに補ふ語を Complement (補語) といふのである。補語になり得るものは名詞形容詞若くは之に代るべき語である。

初學者は兎角目的語と補語とを混同する傾きがある次の例を見てその異なる所を十分に會得して貰ひ度い。

(a) He killed an officer.
 =彼は士官を殺した。

(b) He became an officer.
 =彼は士官になつた。

(a) の“He”と“officer”とは全然別人である。「彼は殺した——誰を——士官を」といふ風に、“officer”は“killed”の目的語である。併し(b)の“He”と“officer”は全くの同一人である。「彼はなつた——何に——士官に」といふ風に、“officer”は補語である。而して斯様に主語と同一物(人)を表はす補語を Subjective Complement (主格補語) といふ。

場合によつては、既に目的語を有する動詞が更に Complement を必要とすることがある。

(a) I have made a box.
 =私は箱を作つた。

(b) I have made him.
 =私は彼を……にした。

今上の二例を比較してみると、(a) はこれだけで纏まつた思想を表はす完全な文章だが、(b) は「彼を……にした」だけでは何の事やら分らぬ。若し(b)に補つて

I have made him a soldier.

ましたら如何であらう、かうすれば「私は彼を軍人にした」で一貫した意味を表はすことになる。“him”を“made”の目的語、“soldier”は意味を完全ならしめんが爲に補つた語であるから補語である。すると此の文は、目的語の外に、補語を必要とするものである。而して“soldier”は目的語に關する補語で之を Objective Complement (目的格補語)といふ。斯様にすべて補語を必要とする動詞を不完全動詞といひ、其の動詞が他動詞の時は之を不完全他動詞、自動詞の時は不完全自動詞といふのである。

Phrase (句) と Clause (節)

Phrase (句) とは、word の結合であつて、一つの纏まつた意義を表はすが、其の中に主語及び述語を含まぬものを云ふのである。Phrase は名詞、形容詞及び副詞の用をなす。名詞の用を成すものを Noun Phrase (名詞句)、形容詞の用を爲すものを Adjective Phrase (形容詞句)、副詞の用を爲すものを Adverbial Phrase (副詞句)といふ。

(a) *To tell a lie is wrong.*

=嘘を吐く事は悪い。

(b) *He knows how to swim.*

=彼は泳ぐ方法を知つてゐる。

(c) *His object is to study languages.*

=彼の目的は語學を研究する事である。

以上の例を見るに、(a) の “To tell a lie” は「嘘を吐く事」といふ名詞句であり、(b) の “how to swim” は「如何にして泳ぐべきかの方法」即ち「水泳法」といふ名詞句であり、(c) の “to study languages” は「語學を研究する事」即ち「語學の研究」といふ名詞句である。

(a) *Here is a stool with three legs.*

=此處に三本脚の床几がある。

(b) *He is a man of wisdom.*

=彼は智慧のある人だ。

(c) *The ship is in sight.*

=船が見えてゐる。

以上の諸例を見るに、(a) の “with three legs” は「三本脚を有せる」の様に、前の “stool” を形容してゐる形容句であり、(b) の “of wisdom” は「智慧のある」の様に前の “man” を形容してゐる形容詞句であり、(c) の “in sight” は「見えて」の意で、“ship” を形容する形容詞句である。形容詞句は多くの場合單純形容詞に書き換へることが出来る。例へば “a stool with

three legs”は“a three legged stool”と, “man of wisdom”は“a wise man”と, “in sight”は“visible”との様に。

(a) I was born in this place.

=私は此處で生れた。

(b) He did it with ease.

=彼は容易にそれをやつた。

(c) By and by he will learn it.

=やがて彼はそれを覚えるだらう。

以上の諸例を見るに、(a)の“in this place”は「此處で」の意味の副詞句で書換へれば“here.”(b)の“with ease”は「容易に」の意の副詞句で單純副詞にすれば“easily.”(c)の“by and by”は「やがて」「間もなく」の意の副詞句で、“soon”に書換へる事が出来る。

Clause (節)とは文の一部であつて、而かも其中に主語及び述語を含むものをいふのである。即ち一つの短文である。例へば：

(a) We all know that he is innocent.

=彼が無罪だといふ事は吾々皆知つてゐる。

(b) I will not start if it rains.

=雨が降れば私は出發しない。

(a)の“he is honest”は文の一部であつて、而も“he”といふ主語と、“is honest”といふ述部を備へてゐる。(b)の“it rains”は簡單乍らも“it”なる主語と“rains”なる述語とを備へてゐる。此等を「節」といふのである。ところが節は文の構造の上から次の二種類に分たれる。

1. Independent Clause (獨立節)——これは文中にあつて對等の位置にある節を云ふのである。例へば：

(a) He came and I went.

=彼が來て私が行つた。

(b) He succeeded but I failed.

=彼は成功したが、私は失敗した。

(a)の“He came”と“I went”の二つの節は、位が對等で、何れが主、何れが従と區別をつける事は出来ない。また(b)の“He succeeded”と“I failed”の關係も同様。斯様な節を獨立節と稱するのである。

2. Dependent Clause (從節)——これは他の節に附隨してゐるものである。謂はば寄生虫、油虫である。これに對して主人公になる節を Principal clause (主節)といふ。

(a) I know *that he is honest.*

= 彼が正直である事は私は知つてゐる。

(b) I will not start *if it rains.*

= 雨が降れば私は出発しない。

上例中、(a) に於ては “I know” は主で、これが主節、“he is honest” は之に従つてゐる従節である。(b) に於て、“I will not start” が主で、これが主節、“it rains” は之に伴ふ従節である。

従節は名詞、形容詞及び副詞の用を爲す。名詞の用を爲すものを Noun clause (名詞節)、形容詞の用を爲すものを Adjective clause (形容詞節)、副詞の用を爲すものを Adverbial clause (副詞節) といふ。

(a) *That he will succeed*, is certain.

= 彼が成功する事は確實である。

(b) We know *that he is guilty.*

= 彼が有罪だといふ事は吾々知つてゐる。

(c) The truth is *that I have no money.*

= 實の所は私には金がない。

上例 (a) の “That he will succeed” は「彼が成功する事」即ち「彼の成功」で名詞節、これを簡単に書換へれば “His success” となる。(b) の “that he is guilty”

は「彼が有罪であること」即ち「彼の有罪」の意の名詞節、書換へれば “his guilt.” (c) “that I have no money” は「私に金のないこと」即ち「私の無一文」の意の名詞節。

(a) A man *who is careful* never courts danger.

= 注意深い人は危険を招くことはない。

(b) I don't know the time *when he came.*

= 彼が何時来たかその時を知らない。

(c) This is the book *that I bought yesterday.*

= これが昨日買った本です。

上例中、(a) の “who is careful” は「注意深い」の意で前の “man” を形容する形容詞節、(b) の “when he came” は「彼が来た時の」の意で、“time” を形容する形容詞節、(c) の “that I bought yesterday” は「昨日私が買ったところの」の意で、“book” を形容する形容詞節。

(a) Snow melts *when the sun shines.*

= 雪は太陽が照ると解ける。

(b) I will go *if it is fine.*

= 晴天なら行かう。

(c) I could not go *because I was ill.*

=病氣だつたから行かれなかつた。

上例中 (a) の “when the sun shines” は「太陽が照る時……する」の様に、動詞 “melts” を修飾してゐる副詞節、(c) の “if it is fine” は「天気ならば……する」の様に、“go” を修飾する副詞節、(e) の “because I was ill” は「病氣だつたから……しなかつた」の様に、“go” を修飾する副詞節である。

文の種類

文はその構造の上から、また用法の上から色々に分類することが出来る。構造によれば三種に、用法によれば四種に分たれる。

I. 構造上の分類

1. Simple Sentence (單文) —これは一つの主語と述動詞を含むものをいふ。一例へてみれば一人の人間の様なもので、頭が一つ胴が一つである。而して勿論歩く時は一人で歩く。單文の中には句を含むことはあるが、節を含む事は絶対にない。ない譯である、何故なれば節を含むといふ事は即ち二つ以上の主語と述動詞を含むことになるのだから。

(a) It is a dog.

=それは犬である。

(c) He is proud of his wealth.

=彼はその財産を自慢にする。

以上の例は何れも單文である。

2. Complex Sentence (集合文) —これは二つ若くは二つ以上の獨立節から成るものである。例へてみれば一人歩きの出来るものが互ひに手に手を取つて歩いて居るといふ格である。

(a) He is learned and knows everything.

=彼は學問があつて、何でも知つてゐる。

(b) He is ill, so he is absent.

=彼は病氣だ、だから欠席してゐる。

上例 (a) の “He is learned” と “he knows everything” は共に獨立節で、接續詞 “and” で結合されてゐる。(b) の “He is ill” と “he is absent” は共に獨立節で “so” なる接續詞で結合されてゐる。

3. Compound Sentence (複合文) —これは主節と從節とより成るもの、謂はば、一人歩きの出来るものが子供を負ぶつて行くといふ形である。

(a) He is proud that he is rich.

=彼は金持である事を自慢する。

(b) He is absent because he is ill.

=彼は病氣だから欠席してゐる。

上例(a)の“proud”は主節で、“he is rich”は従節である。また(b)の“He is absent”は主節で“because he is ill”は従項である。

同じ意味のことを、以上の三つの種類の文で云ひ表はす事が出来る。例へば

「彼は學問があるのを誇りとしてゐる」

〔單文〕 He is proud of being learned.

〔集合文〕 He is learned, and he is proud of it.

〔複合文〕 He is proud that he is learned.

2. 用法上の分類

1. Assertive Sentence (平叙文)——これは單に事を素直に平に述べるもので、文の最も普通なもの柄である。

I am a student.

=私は學生である。

I have many friends.

=彼は澤山の友人を持つてゐる。

2. Interrogative Sentence (疑問文)——之は問を發する文である。此の文の終りには Interrogation Mark

(疑問符)即ち(?)を付ける事を忘れてはならぬ。そしてその特長として主語と述動詞の位置が轉倒するものである。

Are you a student?

=君は學生ですか。

Have you many friends?

=君は澤山友人がありますか。

When did you buy that watch?

=何時君はその時計を買つたのか。

3. Imperative Sentence (命令文)——これは命令及び依頼を表はす形である。特徴としては主語を省くこと。省かれる主語は常に“you”である。直接命令を受けるものは“you”に極まつてゐるから省くのである。

Go to school now.

=さア、學校へおいで。

Read your book once more.

=もう一度本を讀みなさい。

Please shut the door.

=何卒扉を閉めて下さい。

4. Exclamative Sentence (感歎文)——これは卑

近な口調を用ひれば「何てまがいゝんでせう」の様に感歎を表はす文である。そして此の文の終りには Exclamation Mark (感歎符) 即ち(!)を附けることを忘れてはならぬ。

What fine weather it is!

= 何さいふ宜い天氣でせう。

How beautiful this flower is!

= 何て此の花は美しいでせう。

以上の如く、感歎文は “what;” “how” で書き始めるのである。但し “what” は形容詞だから、その次には名詞及び名詞句が伴ひ、“how” は副詞でその次には形容詞、副詞若くは動詞が伴ふものである。感歎文の時は何に關はらず “What” か “How” を始めへ出せばよいと誤解し易いから念の爲めに附加へておく。上例でも、“what” の次の “fine weather” は名詞句であり、“How” の次の “beautiful” は形容詞である。

最後に、文が打消を表はす時はそれを Negative Sentence (否定文) と云ひ、これに對して打消しの形でないのを Affirmative Sentence (肯定文) といふ。

Direct and Indirect Speech,

(直接叙法と間接叙法)

Direct Speech (直接叙法)——これは人の言つた言

葉をそつくり其の儘引用した云ひ方で、英語ではその引用した言葉は “ ” で包むことになつてゐる。

次例で其の形成を會得され度し。

He said, “ It is time to go to school.”

= 彼は云つた、「もう學校へ行く時間ださ」。

Indirect Speech (間接叙法)——これは人の云つた言葉の趣意だけを記事文に直した云ひ方である。今直接叙法の例に掲げた文を間接叙法に直すと次の如くなる。

He said that it was time to go to school.

= もう學校へ行く時刻だと彼が云つた。

此の時、直接叙法の時の “it is” が “it was...” 過去形になる事に注意。此の事に關する詳しい事は本講義の上級の巻で説明することとして、今はこれ丈けに止めておく。

N O U N

(名 詞)

1. Common Noun (普通名詞)

- | |
|--|
| (a) I have a <i>dog</i>
= 私は犬を一匹持っています |
| (b) I have two <i>dogs</i>
= 私は犬を二匹持っています |

〔解 説〕

物の名、人の名、動作の名、性質の名など、凡そ名のつくものは皆名詞であるが、その中にも色々種類があつて、就中最も数の多いのが此處に述べやうとする普通名詞である。上例の“dog”は申すまでもなく「犬」であるが、“dog”と云へば同種類のものに普く通じた名稱である。うちの「ヂヨン」も、隣の「ボチ」も、横町の「ボチ」も、毛色や大いさや、性質や、種に相異こそあれ、「犬」である點に於てはどれも同じである。その他“horse (馬);” “mouse (鼠);” “book (本);” “apple (林檎);” “man (人間) 殆ど皆普通名詞である。吾々の

眼に映するものの大半は普通名詞であると云ひ得るのである。

單數 (Singular) と複數 (Plural)

普通名詞は其種類全體に通ずる名稱であるから之を一つ二つと數へることが出来る。一つの物を言ひ表すに用ひる形を單數 (Singular) と云ひ、二つ以上の物を言ひ表すに用ひる形を複數 (Plural) と云ふのである。邦語にも此の單數複數を表はす方法はあるにはある、例へば一人の「子供」に對して多數の子供を「子供等」と呼び、「あの人」に對して「あの人達」など。併しかうした例は極めて少數で多くの場合は單數でも複數でも名詞其物には何等の變化をも及ぼさぬのである。英語では此の區別が非常に八釜しいので、従つて一つの名詞を覺えたら必ずその單複數の形を呑込んでおかねばならぬ。

複數の作り方

(a)——大抵の普通名詞は單數の語尾に“s”を付けて複數を作る。例へば：

(單)	(複)	(單)	(複)
Table	— tables (卓子)	Book	— books (本)

Pen —pens (ペン)	Hat —hats (帽子)
Cat —ca's (猫)	House—houses (家)
Car —Cars (車)	School—Schools (學校)

(b)——“s” “x” “sh” “ch” で終る語には “es” を付けて複數を作る。何故 “s” 丈で悪いかといふと “s” とか “x” の様な文字の後へ “s” を加へて發音しても “s” を附けたのか附けないのか分からないからである。

(單)	(複)	(單)	(複)
Kiss—(接吻)—kisses		Fox—(狐)—foxes	
Fish—(魚)—fishes		Bench—(腰掛)—benches	

(c)——次に、單數名詞の語尾に “o” が一つあつて、其前に子音字 (Consonant) がある時にも “es” を付けて複數を作る。例へば：

(單)	(複)	(單)	(複)
Hero—(英雄)—heroes		Potato—(甘藷)—potatoes	

[注意]: “o” が一つあるさういふ事が大切な條件で、若し “o” が二つある場合には上の規則に當嵌らず、只 “s” 丈けを付けるのである。例へば “bamboo” (竹) の複數は “bambooes” ではなくて、 “bamboos” である。但し “Piano” (ピアノ) は例外で複數は “pianos” で

ある。

(d)——語尾に “y” があつて、其前に子音字がある語の複數を作るには、先づ “y” を “i” に變へ然る後 “es” を付けるのである。例へば：

(單)	(複)	(單)	(複)
Fly—(蠅)—flies		city—(都會)—cities	
Baby—(赤兒)—babies.		Lady—(婦人)—ladies.	

[注意]: 但し、 “day” “boy” なきは “y” で終つてゐても前にあるのが母音字だから “days” “boys” とはならず、 “days” “boys” となる。

(e)——語尾が “f” 又は “ve” で終る語を複數にするには大體に於て “f” を “v” に變じて “es” を付ける。

(單)	(複)	(單)	(複)
Half—(半分)—halves		Knife—(小刀)—knives.	
Leaf—(葉)—leaves		Life—(生命)—lives.	

さうかと思ふと、次の様に只 “s” 丈け付けて作るものもある。だから一般的な規則を設けることは出来ない。學者は一語一語に就て複數形を覚えておかねばならぬ。

(單)	(複)	(單)	(複)
-----	-----	-----	-----

Roof—(屋根)—roofs Chief—(首長)—chiefs
 Gulf—(灣)—gulfs Safe—(金庫)—safes

(f)——最後に、一定の規則によらず不規則な變化をするものがある、それを更に二つに分けると、(a)母音變化(b)語尾に“en”を附するものの二つである。

[(a)の場合]

(單)	(複)	(單)	(複)
Foot—(脚)—feet	Goose—(鶩鳥)—geese		
Man—(人間)—men	Mouse—(鼠)—mice		
Tooth—(齒)—teeth	Woman—(女)—women		

[(b)の場合]

(單)	(複)	(單)	(複)
Ox—(牡牛)—oxen	Child—(子供)—children		

(g)——それから、單數も複數も形に於て少しも變らぬ名詞がある)例へば:

(單)	(複)	(單)	(複)
Deer—(鹿)—deer	Sheep—(羊)—sheep		
Salmon—(鮭)—salmon	Swine—(豚)—swine		

2. Proper Noun (固有名詞)

America was discovered by Columbus.

=亞米利加はコロンバスによつて發見された。

【解 説】

單に「國」と云つたり、「人」と云つただけでは何處の國やら、誰のことやら皆目分らないが、「米國」といひ、「コロンバス」と云へば、「ウム、あの米國か」、「ウム、あのコロンバスが」といふ様に、他の國乃至他の人との區別が出来て、何處の國の話をしてゐるのか、誰の話をしてゐるのかが明瞭に分る。斯様に、箇々の「物」や「人」に特別に附けた名が Proper Noun (固有名詞)なのである。地名や、人名や、山川、湖沼、船艦、學校、出版物などの名など皆之に屬するのである。而して固有名詞に就て決して忘れてならぬ事は Capital Letter (大文字) で書始めることである。

3. Material Noun (物質名詞)

A bottle is made of glass.

=罎は硝子で出来てゐる。

〔解 説〕

今此處に壘があるとする、壘には一定の形があつて、一つ二つと數へられるから無論普通名詞であるが、假りに之を石に叩きつけて毀したと思ひ給へ。毀れて了つたものはもう壘ではない。では何だ？ 硝子である。その破片をどんなに細かくつぶしても硝子は何處迄も硝子である。物理學上の語を借りて云へば、壘は「物體」で、硝子は「物質」である。斯様に、一定の形なく、之を如何様に變化してもその素質を失はぬものに附ける名が Material Noun (物質名詞) である。物質は往々物體を作る材料に用ひられるところから一つに邦語で「材料名詞」とも呼んでゐる。次に列挙したのは皆物質名詞である。

wood (材木)	gold (金)	sugar (砂糖)
salt (鹽)	water (水)	smoke (煙)
paper (紙)	wine (酒)	

ところで、物質名詞は前述の如く定まつた形がないから一つ二つと數へることが出来ない、従つて“a”も附かなければ複數形にもならぬ。だから、若し一定の分量を示す必要がある場合には何か他の語を補はねばならぬ。例へば：

A sheet of paper = 紙一枚

A piece of chalk = 白墨一本

A bottle of wine = 酒一本

A glass of water = 水一杯

A cup of tea = 茶一杯

A spoonful of sugar = 砂糖一匙

A handful of rice = 米一掴み

又若干量を表はすには“some”を附けて次の様に云ふ。

1. I have *some* bread.

= 僕はパンを少し持つてゐる。

2. I want *some* water.

= 水を少し欲しい。

3. Give me *some* sugar.

= 砂糖を少々下さい。

Abstract Noun (抽象名詞)

All men seek for *happiness*.

= すべての人は幸福を求める。

〔解 説〕

今茲に白い手巾、白い紙、白いチョーク、白い前掛、

白い砂糖、白い雪の様な、白い物體から「白」といふ性質を抽出して考へるここが出来。かやうに物それ自身に關係なくして、其等に共通な性質や状態や動作を抽出して、其の性質や状態や動作に附けた名稱が抽象名詞である。一口に云へば抽象的觀念を去はすものに附けた名である、従つて眼に見、手に獨れる事は出来ないだから物質名詞と同様冠詞は不要、複數形にもならぬ。だが或る特別の場合をいふ時は定冠詞を附ける。例へば：

- (a) *Wisdom is gained by experience.*
=知識は經驗によつて得られる。
- (b) *He has the wisdom of Solomon.*
=彼はソロモンの智慧を有す。

(a) は一般の場合だから“wisdom”に冠詞は要らないが、(b)に於ては「ソロモンの智慧」に特別の場合の智慧をいふのだから“the”を附ける必要がある。

抽象名詞の普通名詞化

抽象名詞が普通名詞に變ることがある、この時は一切普通名詞の規則に従ふのであるが、但し意味の上に若干の變化がある事に注目せねばならぬ。今その數例を挙げれば：

- Art is long, life is short.* [抽]
=學藝は成り難く入生は短し
- Teaching is an art.* [普]
=教授法は一種の技術である。
- Vice is alluring.* [抽]
=罪惡は人を誘惑する。
- Lying is a vice.* [普]
=虚言は一つの罪惡行爲である。
- I am learning painting.* [抽]
=私は畫法を習つてゐる。
- He gave me a painting.* [普]
=彼は私に繪を一枚呉れた。
- There is room for one more.* [抽]
=もう一人入る丈の余地がある。
- This is a room for you.* [普]
=これがお前さんの室です。
- Beauty in dress is a good thing.* [抽]
=着物の美しいのは宜いものです。
- She was a beauty.* [普]
=あの女は美人だつた。

(Case 格)

The boy struck the dog with his brother's stick.

=その子供は兄のステッキでその犬を打つた。

〔解 説〕

名詞が文中の他の語に對する關係を (Case 格) といふので、それには次の三つの種類がある。

1. Nominative Case (主格)——今上例中の“dog”に就て見るに、之は「兄のステッキで犬を打つた」の「打つた」をいふ動作の御本人、即ち“struck”なる動詞の主語である。斯様にすべて動詞の主語たるものを Nominative case といふのである。而して之を譯す際には邦語のテニヲハとして「～が」「～は」が當はまる。

2. Possessive Case (所有格)——名詞が他の名詞の前にあつて、所有を表はしてゐる時をいふのである。上例の“brother's”がそれで、邦語の「～の」をいふ場合に當る。そして此の格は語尾に's を付けて作るのである。

單に's を付けて「～の」の意を表はすところは誠に便

利であるが、名詞によつては's を附て「～の」の意を表はすことが出来ないのがある。例へば“the man's legs” (人の足) は正しいが、“the table's legs” (卓子の脚) とは云はれない。この方は“the legs of the table” としなければならぬ。何故だらう？一體所有といふ事は生物の場合に於てのみ意味があるので、無生物が物を所有するといふ事は意味を成さぬ。人間は生物であるから「人間の所有する足」即ち“man's legs” と云へるが、卓子は無生物故“the table's legs” とは云はれぬのである。だから先づ無生物には's は附けられない。云換へれば所有格はあり得ないものと覚えておくがよい。併し例外はいくらかもある、例へば“to-day's paper” (今日の新聞); “Japan's greatest statesman” (日本の最大政治家) など。

複數名詞を所有格にするには發音の關係上單に'だけを附ければよい。例へば“Girls' school” (女學校); “Boys' magazine” (少年雜誌) など。

また所有格の後には名詞を略すところがある、略される名詞は普通“house”; “shop, store (店) などである。例へば:

(a) I met him at the barber's [shop].

=僕は床屋であの人に會つた。

(b) I am going to my *uncle's* (house).

=私は伯父の家へ行くところです。

(c) He bought the book at *Maruzen's* (store).

=彼は其の本を丸善書店で買った。

3. Objective Cases (目的格) — これは名詞が動詞の目的語である時、又は名詞が前置詞の後に來てその目的語となつてゐる時を云ふので、邦語で「〜に」「〜を」と云ふ場合に當る。上例中の “dog” がそれで、これは “struck” の目的語である。尙前置詞の目的語である場合の例を示せば：

Look at the dog.

=あの犬を見給へ。

“dog” は “at” なる前置詞の目的語で、格は目的格である。

以上の説明によつて了解された事と思ふが、名詞は主格と目的格の場合は形の上に何等の變化なく、只所有格の時だけ 's を付けるのである。

Collective Noun (集合名詞)

(a) The Japanese is a civilized *people*.

=日本人は文明國民である。

(b) *People* say that the cabinet will resign.

=世間の噂では内閣は辭職だらうと。

〔解 説〕

Collective Noun (集合名詞)とは、一個の物又は一人の人に附けた名稱ではなくして、集合團體に附けた名である。例へば上例(a)の “people” がそれで、「國民」である以上は「一人」といふ事はあり得ない。自分の國は五千萬、隣國は四億、といふ様に人數に多寡の差こそあれ、各一つの團體を成してゐる。かうした團體に附けた語である以上、如何に人數が多いからさて、“many peoples”とは云へない。これでは幾種の國民の意になる

ところが集合名詞の中には、常に單數の形で複數の意に用ひられるものがある。上例(b)の “people” が

それである。斯様な場合に限り特に之を Noun of Multitude (群衆名詞) と稱し、之を常に複數として取扱ふのである。即ち一つの集合名詞でもそれを一個の團體として見るか、又は個々的に見るかによつて、一つは單數として取扱ひ、一つは複數として取扱ふのである。次例を比較され度し。

(a) The cavalry was victorious.

= 其の騎兵隊は勝利を得た。

(b) The cavalry (=the whole cavalry soldiers) are poorly mounted.

= 其の騎兵は皆やくざ馬に乗つてゐた。

即ち(a)の“cavalry”は團體として働く騎兵隊の意である故單數として取扱ひ、“was”で受け、(b)の“cavalry”は「あの騎兵も、この騎兵も」の様に個々的に見た故複數の取扱ひをし“are”で受けてある。

ARTICLE

(冠 詞)

I saw a beggar on my way here.

The beggar was blind and lame.

= 此處へ来る途中で乞食に會つた。その乞食は盲目で跛足だつた。

〔解 説〕

冠詞と云ふのは、例へてみようなら吾々の頭髮みたいなもので、凡そ物の名を表はす語の前には大概附くものであるが、邦語にはとんと斯様なものがない丈けに吾々にはそれを呑込むのに非常に骨が折れるのである。

「途中で乞食に會つた」といふ時、其の乞食は別に例の乞食、あの乞食といふ様に一定の乞食を指すのでなく漫然と云ふのである、かういふ時に英語では“a beggar”と云ふのである。此の“a”を I: definite Article (不定冠詞) といふ。元來“a”は“one”の轉訛したもので單數普通名詞に付け、それと定まらぬ即ち「ある」の意を表

はすのである。但し此の“a”は母音字で始まる名詞の前に附く時は“an”に變る。例へば：*an egg* (卵); *an orange* (蜜柑)の様に。これは唯發音上の便宜からである。“a”は父音の前に，“an”は母音の前にとは云ふものの、その父音、母音といふ事に注意せねばならぬ。例へば *useful*, *European* は綴の上からは正に母音で始まつてゐるが、發音するときはゆうスフル、ユーラビアンと父音字で始まつてゐる様に發音されるので冠詞は“a”である。反對に、“*honest man*”に冠詞を附けようとする場合“*honest*”は父音で始まつてゐるからといふので“*a honest man*”としたら間違ひ、何故ならば“*honest*”は“*onest*”の様に發音するから結局母音字で始まつてゐる ことになり、従つて“*an honest man*”とせねばならぬのである。いや冠詞といふものは實に厄介な代物である。

不定冠詞の他の用法

不定冠詞には他に色々の用法がある。

(a) *A dog is a faithful animal.*

= 犬は忠實な動物である。

(b) *He will be here in an hour or two.*

= 一二時間経てば來るでせう。

(c) *They are of an age.*

= 彼等は同じ年輩です。

(a) のは凡そ犬といふものはの様に一種族の代表であることを示し、(b) のは全然“one”と同じく「一つ」の意味、(c) のは“the same” (同じき)の意味である。

さて例文へ後戻りして、“*The beggar ...*”を説明しよう。これは前の「乞食に會つた」の場合とは違つて、不定のものでなく、途中で會つた其の乞食の意味で“*the beggar*”としてあるのである。斯様な“the”を *Definite Article* (定冠詞)と云つてこれは“*this*”の轉訛したもので、その指示するものの定まつてゐる時に用ひるのである。

定冠詞の他の用法

(a) *The first one is the best book I ever read.*

= 第一番目のは私の讀んだ中で一番よい本です。

(b) *The earth moves round the sun.*

= 地球は太陽の周圍を廻る。

(c) *I get up early in the morning.*

= 私は朝早く起きる。

(d) *The horse is a useful animal.*

=馬は有用な動物である。

(a) は first; second; third の様な序数又は best の様な最上級に附けるもの、(b) は唯一の天然物に附けるもの、(c) は午前、午後、夜などの句中に用ひるもの、(d) は單數普通名詞に附して同種族の全體を代表する場合、即ち “the horse” は「其の馬」でなく、「馬さういふものは」の意味である。不定冠詞にも同様の用法がある事は諸君既に御承知の事であらう。

PRONOUN

(代名詞)

1. Personal Pronoun (人稱代名詞)

I think he will give it to you.

=僕は、彼がそれを君に與へると思ふ。

[解 説]

代名詞は其の名の示す如く、名詞の代りに用ひる語である。一々名詞を使はねばならぬ所を此の代名詞がある爲めに至極簡単に用が達せられるといふ誠に重寶なものである。其の中でも、上例中に見る如く、“I” “he” “it” “you” の様に、人又は物を指示するものを Personal Pronoun (人稱代名詞)といふのである。

人稱代名詞と Person (人稱)

代名詞には次の三つの名稱がある。

First Person (第一人稱) — これは話をする當人即ち今の場合ならば “I” “we” である。

Second Person (第二人稱) : — これは話を聞く相手に “you” がそれである。

Third Person (第三人稱):—これは話頭に上る人又は物で “He;” “it;” “they” などである。

〔注意〕 名詞にも勿論人稱はあるが、此の方では大體三人稱に定まつてゐるから特に述べる必要はあるまい。各人稱には夫々單數複數がある、今之を表にして示せば:

	單 數	複 數
第 一 人 稱	I	we
第 二 人 稱	you	you
第 三 人 稱	He, she, it	they

人稱代名詞と格

名詞の場合と同様代名詞にも格の變化がある。名詞の場合は前述の通り比較的簡單だが、代名詞の場合は一々變化するので複雑してゐる。その中人稱代名詞の場合を表にして示せば:

格	主 格	所有格	目的格
一 人 稱	{ I we	{ my our	{ me us
二 人 稱	you	your	you

三 人 稱	{ He	his	him
	{ She	her	her
	{ It	its	it
	They	their	them

〔注意〕: it の所有格の “its” を誤つて “it's” と綴る者がよくあるが、“it's” は “it is” の略字であつて所有格ではない。語尾に “'s” を付けて所有格を作るのは名詞の場合だけであることを忘れてはならぬ。

2. Interrogative Pronoun (疑問代名詞)

- (a) *Who is he?*—He is Mr. Brown.
=あの方は誰ですか——ブラウンさんです。
- (b) *What is this?*—It is a book.
=これは何ですか——それは本です。
- (c) *Which do you like better?*
=どちらが御好きですか。

〔解 説〕

疑問代名詞は人又は物の名などを問ふ時に用ふる語で、上例の “who;,” “ what;” “ which ” の三語が即ち

それで、是等疑問詞は單複とも同じ形である。そして直接疑問の時は必ず文の冒頭におかねはならぬ。

以上の三つの中、“who”は人のみに用ひる語で、其の人の名前とか、または身分關係などを尋ねる場合に用ひられる。“what”は事物に就き其の名を聞くに用ひられるが時として人に用ひられる事もある、その時はその人の職業を尋ねることになる。次例を比較され度し。

(a) *Who is that gentleman?*

=あの人は誰ですか。

(b) *What is that gentleman!*

=あの人は何ですか。

“Which”は人にも事物にも用ひられて選擇の意を表はす。

疑問代名詞と格

“Which”や“What”は格によつて形の上に變化はないが、“Who”だけは所有格の時に“Whose”となり、目的格の時に“Whom”となる。

Whose book is this?

【所有】

=これは誰の本ですか。

Whom do you like best?

【目的】

=誰を一番好みますか。

3. Relative Pronoun (關係代名詞)

(a) *I like a boy who speaks the truth.*

=私は眞實を語る少年を好む。

(b) *He lent me a book which was very interesting.*

=彼は非常に面白い本を私に貸してくれた。

(c) *This is the watch that I lost.*

=これは私が失くした時計です。

【解 説】

關係代名詞とは、先立つ名詞(又は代名詞)を代表して同時に文の二部分を結ぶ役目を果す語、云ひ換へれば代名詞であつて同時に接續詞の働をするものである。而して、これには“who;”“which;”“that”の三つがあるが、“who”は人に用ひ、“which”は物や動物に用ひ、“that”は人及び物に用ひるのである、今「先立つ名詞」(又は代名詞)をいふ事を云つたが、之を

文法上 Antecedent (先行詞) といひ、関係代名詞の前に常におかれるものである。

関係代名詞と格

関係代名詞にも格の變化があつて、“who” は主格所有格が “whose,” 目的格が “whom” である。例文の “who” は主格の場合である。

I have a friend *whom* I like very much. [目的]
= 私に一人の友人あり、それを私は非常に好む。

I have a friend *whose* father is dead. [所有]
= 私に一人の友人あり、その父は死んだ。

“which” には所有格はない、それで “who” の所有格 “whose” を拜借に及んで間に合はせる。目的格は矢張り “whom” である

The mountain *whose* summit we see is Mt. Niitaka.
[所有]

= 頂上に見えるあの山が新高山だ。

He showed me a picture *which* he had painted.
[目的]

= 彼は自分の描いた繪を私に見せた。

ところが最後の “that” であるが、これには所有格

が全然ない、といふよりも所有格の場合には決して使はれないのである。主格は “that,” 目的格も “that,” 文例中の “that” は何格だらう? 主格? 否、目的格である。

“That” は “who,” “which” の代りに用ひられる事云つたが、如何しても “that” でなければならぬ場合がある。それは次の通り。

(い) 先行詞の形容詞が最上級なる時。

He is the *tallest* man *that* I ever saw.

= 僕が今迄見た中で彼が一番丈が高い。

(ろ) “The only;” “the very” などの次。

He was the *only* boy *that* failed.

= 落第したのはあの子だけ。

(は) 人と動物(又は物)とが先行詞の時。

The *boy* and his *horse* *that* fell over the precipice were killed on the spot.

= 崖から落ちた子供と馬とは即死した。

[註] (は)の場合 “boy” は人だから “who” を用ひ、“horse” は動物だから “which” を用ひて “who and which” として可笑しいから、そこは臨機應變に融通を利かした次第である。

4. Demonstrative Pronoun (指示代名詞)

This is a pen; that is a pencil.
 =これはペンである; あれは鉛筆である。

〔解 説〕

指示代名詞といふのは、「これ」とか「あれ」さか「それ」とか云ふ様に、物を指示するものを云ふのである。上例の“*This*”は「これ」といふ単数で、その複数は“*these*”; “*that*”は「あれ」「それ」といふ意味の単数で複数は“*those*”である。

此等“*This*”; “*that*”; “*these*”; “*those*”の次に何か名詞が附くと形容詞になる所から、一名之等を Adjective Pronoun (形容代名詞)とも呼んで居る。

ADJECTIVE

(形 容 詞)

1. Pronominal Adjective (代名形容詞)

- (a) *This book is very interesting.*
 =此の本は非常に面白い。
- (b) *Bring me another cup of tea.*
 =お茶をもう一杯下さい。
- (c) *I like both books.*
 =どちらの本も好きです。

〔解 説〕

形容詞の定義は諸君先刻御承知の事であらうが、その種類に三つある。その中 Pronominal Adjective (代名形容詞)といふのは、代名詞の性質を持つてゐる形容詞。否、形容詞の働きをする代名詞と云つてもよいほどのものである。(指示代名詞の條参照)。(a)の“*this book*”の“*book*”を取れば“*This*”は代名詞になる、(b)の“*another cup*”の“*cup*”を取れば“*another*”は代名詞になり、(c)の“*both books*”の“*books*”を除

けば “both” は代名詞になるといつた様な次第。此の外, “all;” “any;” “each;” “either;” “few;” “neither;” “other;” “that” など皆代名形容詞である。此等の語は形容詞にも代名詞にも用ひられることは今云つた通りだが、その何れであるかは、次に名詞があるかないかに依つて區別が容易である。名詞が伴へば形容詞に用ひられた場合である。

2. Qualifying Adjective (限定形容詞)

- | |
|--|
| (a) The book has <i>blue</i> covers.
= その本は青い表紙です。 |
| (b) He is a very <i>kind</i> gentleman.
= あの人は非常に親切な人です。 |
| (c) The <i>poor</i> little bird is <i>dead</i> .
= その可哀相な鳥は死んだ。 |

〔解 説〕

Qualifying Adjective (限定形容詞) これは、物又は人の性質状態を表はすもので、大多数の形容詞は此の部に属するのである。云はば此の限定形容詞が形容詞といふものを代表するといつてもいゝのである。上例の “blue” にしても “kind” にしても, “poor”

にしても “little” にしても “dead” にしても皆さうである。

ところで、此の限定形容詞を更に細かに別けると Proper Adjective (固有形容詞), Material Adjective (物質形容詞), Verbal Adjective (動詞的形容詞) などになる。今其各々に就て二三の例を挙げれば:

固有形容詞	物質形容詞	動詞的形容詞
Japanese (日本の)	Earthen (土の)	Surprising (意外な)
American (米國の)	Woollen (毛の)	Crying (泣ける)
Italian (伊太利の)	Wooden (木の)	Burnt (焼けた)

“Japanese” は “Japan” といふ固有名詞から, “American” は “America” から, “Italian” は “Italy” から出て來た形容詞

“Earthen;” “Woollen;” “Wooden” は夫々 “Earth;” “wool;” “wood” といふ物質名詞から出て來たもの。“surprising;” “crying” は “surprise;” “cry” の現在分詞が形容詞になつたもの, “Burnt” は “burn” の過去分詞が形容詞になつたものである。

3. Quantitative Adjective (數量形容詞)

- | |
|---|
| (a) He has <i>much</i> money and <i>many</i> friends. |
|---|

=彼はウンと金があるし友人も多い。

(b) He has little money and he must be content with *a few* books.

=彼は金がないから僅かの本で満足せねばならぬ。

〔解 説〕

Quantitative Adjective (数量形容詞) はその名の示す如く数又は量を示す形容詞である。上例(a)の“much”は「多量の」、 “many” は「多数の」の意、(b)の“little”は「極めて少量の」、 “a few” は「少数の」の意味である。同じ多いても量の多いには“much”を、数の多いにはmanyを用ひることに注意、又同じ「少い」でも量の少いには“little”を、数の少いには“few”を用ひることに注意を要する。尙“little;” “few”に“a”が附く場合と附かない場合では意味の上に相異がある。それは次の例で會得を願ひ度い。

I have *little* money.
=金は少ししかない。
I have *a little* money.
=少しは金がある。

He has *few* relatives.
=彼には親戚が少ししかない。
He has *a few* relatives.
彼には少しは親戚がある。

要するに、“little;” “few” は「ない」方に重きをおき、“a little;” “a few” は「ある」方に重きをおいた云ひ方であると思へばよからう。

形容詞の用法

形容詞にはその位置の上から別けて次の二つの用法がある。

1. Attributive Use (連體的用法)——これは邦語の場合と同様名詞に直接附けて用ひる場合である。

例へば：——

I have a *black* dog.
=僕は黒い犬を持つてゐる。

That *large* book is a dictionary.
=あの大きい本は辭引です。

2. Predicative Use (述語的用法)——これは形容詞が間接に主語又は目的を形容して、述部の一部分となる場合を云ふのである。例へば：

My dog is *black*.

=僕の犬は黒い。

The dictionary is large and heavy.

=あの辞書は大きくて重い。

即ち形容詞 “black” は直接 “dog” を形容しては
ゐないが遠くはなれて之を形容してゐる。又 “diction-
ary” に對する “large:” “heavy” の關係も同様であ
る。

Comparison (比較)

(a) He is a great man.

=彼は偉人である。

(b) He is greater than Bismarck.

=彼はビスマルクより偉い。

(c) He is the greatest man in the East.

=彼は東洋第一の偉人である。

【解 説】

すべて物なり人なりを比較するところが Comparison で
あるが、その中 (b) の如く二人の人(又は二つの物)を
比較してその優劣を云ふ形を Comparative Degree (比
較級) といひ、(c) の如く、三人(又は三つの物)以上

を比較して其の中で一番……といふ意を表はすのが
Superlative Degree (最上級) である。而して (a) の “great”
の如く形容詞本来の形を Positive Degree (原級) といふ
のである。

比較の作り方

(い) — 一音節の語と二音綴の語の少数は 級形
の語尾に -er, -est を付けて比較級最上級を作るのであ
る。例へば:

原 級	比 較 級	最 上 級
cold (寒き)	colder	coldest
clever (賢き)	cleverer	cleverest
narrow (狭き)	narrower	narrowest

但し原級の語尾によつて只 -er, -est を付ける丈でな
く、綴りにも多少變化を及ぼす語がある。

(A) wise (賢き)	wiser	wisest
noble (貴き)	nobler	noblest

此の場合は語尾が e で終つてゐる語であるが、若し
其儘で -er, -est を付けると wis^{er}, wis^{est} の如く發音
することが出来ぬ妙な形になるので、語尾の e を除い
て -er, -est を付けるのである。

[B] big (大なる)	bigger	biggest
thin (薄き)	thinner	thinnest

此の場合の如く一音節の語で一つの子音字で終つてゐて其の前に一つの母音字が來てゐる時は、最後の子音字を二つにして後 *-er*, *-est* を付ける。

[C] easy (容易な)	easier	easiest
happy (幸福な)	happier	happiest

此の場合は *easy*, *happy* などの如く語尾が *y* であり其の前に子音字が來てゐれば其 *y* を *i* に變じて *-er*, *-est* を付けるのである。

(ろ)——二音節の語の多數と三音節以上の語には *-er*, *-est* の代りに *more*; *most* を語の前に置いて比較級最上級を作る。

原 級	比較級	最上級
famous (名有な)	more famous	most famous.
honest (正直な)	more honest	most honest.
beautiful (美しい)	more beautiful	most beautiful.
interesting (面白い)	more interesting	most interesting.

[註] “famous” “honest” は二音節, “beautiful;” “interesting” は三音節の語である。

(は)——今迄述べたのは皆規則的變化ばかりでおつたが、中には不規則な變化をするのものもある。その重な

るものは:

原 級	比較級	最上級
good (善い)	better	best
bad } (悪い)	worse	worst
ill }		
many } 澤山の)	more	most
much }		
little (少しの)	less	least
old (老いたる)	{ older	{ oldest
	{ elder	{ eldest

[註] 上掲の “older;” “oldest” は年齢に關する丈けだが “elder;” “eldest” は “elder sister” (姉); “eldest son” (長男) などの如く家族の關係を表はすに用ひられる最後に、忘れてならぬ事は、最上級には必ず定冠詞を付けることである。それは當然のこと、何故ならば「一番……」を云へば一つ(一人)しかない譯だから。それから比較級には “than” が伴ふことにも注意但し比較の相手を強ひて示す必要のない時は別問題である。

Numerals (數詞)

定まつた數を表はす語を Numerals (數詞) と云ふ。こ

れには、「一つ、二つ、三つ」の如く数へる Cardinals (基数) と、「第一、第二、第三」の如く順序を云ふ Ordinals (序数) と二種ある。

	Cardinals	Ordinals	
I.	1 one (一)	first (第一)	1st
II.	2 two (二)	second (第二)	2nd
III.	3 three (三)	third (第三)	3rd
IV.	4 four (四)	fourth (第四)	4th
V.	5 five (五)	fifth (第五)	5th
VI.	6 six (六)	sixth (第六)	6th
VII.	7 seven (七)	seventh (第七)	7th
VIII.	8 eight (八)	eighth (第八)	8th
IX.	9 nine (九)	ninth (第九)	9th
X.	10 ten (十)	tenth (第十)	10th
XI.	11 eleven (十一)	eleventh (第十一)	11th
XII.	12 twelve (十二)	twelfth (第十二)	12th
XIII.	13 thirteen (十三)	thirteenth (第十三)	13th
⋮	⋮	⋮	⋮
XX.	20 twenty (二十)	twentieth (第二十)	20th
XXI.	21 twenty one (二十一)	twenty-first (第二十一)	21th
⋮	⋮	⋮	⋮
XXX.	30 thirty (三十)	thirtieth (第三十)	30th
XL.	40 forty (四十)	fortieth (第四十)	40th
L.	50 fifty (五十)	fiftieth (第五十)	50th
LX.	60 sixty (六十)	sixtieth (第六十)	60th
LXX.	70 seventy (七十)	seventieth (第七十)	70th

LXXX	80	eighty (八十)	eightieth (第八十)	80th
XC	90	ninety (九十)	ninetieth (第九十)	90th
C	100	hundred (百)	hundredth (第百)	100th
CI	101	one hundred and one (百一)	hundredth and first (第百一)	101th
D	500	five hundred (五百)	five hundredth (第五百)	500th
M	1000	one thousand (一千)	thousandth (第一千)	1000th

以上の中で特に次の事に注意を要する。1st (first; 2nd (second), 3rd (third), 4th (fourth) 等は解つたであらうが、11th (eleventh) を 11st としたり、12th (twelfth) を 12nd としたりするのは間違ひ。また eighth, ninth, twelfth, fortieth, ninetieth 等の綴字を誤らぬ事、又 forty を *fourty* と綴らぬ様。尙数の読み方に就て次の事を注意せねばならぬ。

123 = one hundred and twenty-three

365 = three hundred and sixty-five.

2,003 = two thousand and three.

つまり、hundred の次には必ず and を入れて読むことと、twenty から ninety に至る十位の數に單位數を加へるには twenty-three; sixty-five の様に Hyphen (はイフン) を入れて書くこと、此等が主要なる注意である。

V E R B

(動 詞)

動詞は文中缺く可らざる要素で、状態又は動作を表はすものである。邦語では動詞は常に文の終りに来るものであるが、英語ではさうした場合は却つて少い。すべて英語の文は其の文中の動詞の種類によつて其の形が色々に變るものであるから構文の研究は即ち動詞の研究になるわけである。英文の基礎となるべき構文は六つあるが、これから逐次それを説明することとする。

(構 文 第 一)

The sun shines.

=太陽が照る。

〔解 説〕

上例の文章は“sun”といふ主語と“shines”といふ動詞から成立つ頗る簡単なものである。さて“shine”といふ動詞を考へてみるに、照るといふ働は何等相手なしに出来る動作である。「殴ぐる」などいふ動作は「殴ぐられる」相手があるなりや出来ない相談だが「照

る」のはさういふものの必要がない、自分ひとりで勝手に照り得るのである。照るといふ働は他に對して何等の影響をも與へないのである。斯様な種類の動詞を Intransitive Verb (自動詞)といふのである。

構 文 第 二)

(a) He is a rich man.

=彼は金持である。

(b) He became a rich man.

=彼は金持になつた。

〔解 説〕

(a) の“is” (be の變化)の如く「……は……である」の意を示す動詞、これも矢張り自動詞ではあるが、單に數學の等號(即ち=)の働きをする文の動詞故、特に之を名づけて Copula (即動詞)といふ。つまりこれは“He”なるものは“rich man”に等しいといふ事を示すに止まるのである。次に(b)の「……になる」意味の“became”といふ動詞、これも亦此の部に屬する動詞である。

ところで諸君、上の構文中の右邊“a rich man”がないとしたら、此の文の意味が通じますか、纏まります

か？左様、纏まらない、してみれば此の右邊の部分は意味を完全ならしめんが爲めには是非共缺くべからざるものである。かういふ部分（名詞又は形容詞）を Complement（補語）と云ひ、かうした補語を必要とする動詞（今の場合ならば “is;” “become”）を不完全動詞と云ふのである。

（構文第三）

The teacher punished the boy.
= その先生はその少年を罰した。

〔解説〕

上例の “punish” なる動詞を考へてみるに、「罰する」からには「罰せられる」ものがあるなければならぬ。罰したけれど罰せられた人間があるなどいふ事はあり得ない。斯様に相手がなければ出来ない様な動作を表はす動詞を Transitive Verb（他動詞）と云ふのである。そしてその動詞の働きを受けるもの、今の場合ならば “boy.” これを其の Object（目的語）と云ふのである。

（構文第四）

- (a) I gave him a book.
= 彼は彼に本をやつた。
(b) He made me a kite.
= 彼は私に凧を作つて呉れた。

〔解説〕

他動詞の中には、其の次に「誰々に」こ人を表はす目的語と、「何々を」と物を表はす目的語と、二つの目的語の伴ふのがある。上例の “give;” “made” がそれで、夫々 “him;” “book;” “me;” “kite” といふ二つ宛の目的語を持つてゐる。斯様な動詞をすべて *Dative Verb*（與格動詞）と云ひ、その二つの目的語を區別する爲めに「誰々に」の方を Indirect Object（間接目的）と名づけ、「何々を」の方を Direct Object（直接目的語）と名付けてある。上例で云へば “him;” “me” が間接で、“book;” “kite” が直接である。與格動詞の他の主なるものは “bring;” “lend;” “send;” “sell;” “pay;” “tell;” “owe;” “teach;” “buy;” “get” 等である。

此の構文の二つの目的語の順序をかへて、「誰々に」の方を、「何々を」の方の次に置くことがあるが、其の場

合には「誰々に」の「に」に相当する前置詞を其の前に置かねばならぬ。其の前置詞は “buy;” “get;” “make” の場合には “for” であるが、其他の場合には大抵 “to” だと思つて差支ない。例へば：

(a) I gave him a book.

=I gave a book to him.

=私は彼に本をやつた。

(b) He made the boy a kite.

=He made a kite for the boy.

=彼はその少年に凧を作つてやつた。

(c) I bought my sister a doll.

=I bought a doll for my sister.

=妹に人形を買つてやつた。

併し斯様に前置詞を用ひて書換へた場合には此等の動詞は最早與格動詞ではなくなるのである。

(構文第五)

I made him a servant.

=私は彼を召使にした。

[解説]

上例の “made” といふ動詞に就て見るに、これは

普通の「作つた」の意味でなく「誰々を……に(と)した」の意、従つて “made him” だけでは意味が完全しない。是非共「……にした」と補はねばならぬ。すると上例の “servant” はつまり Complement で、目的語 “him” を説明するここになるのである。斯様に、他動詞の中で、目的語の外に其の目的語を説明する Complement を置かなければ完全な意味を成さぬものを名けて Factitive Verb (作爲動詞) といふのである。此の部に屬するものには上例の “make” の他に “call;” “think” などがある。

They think him happy.

=彼等は彼を幸福と思つてゐる。

He calls me a fool.

=彼は私を馬鹿と云つてゐる。

(構文第六)

He is loved by all.

=彼は萬人に愛される。

[解説]

これは「～に……される」の様に、主語が他の者から

働きを受けることを表はす構文で所謂 Passive (受身) といふ奴である。詳細は後章 “Active と Passive” の條で説明することとする。

Conjugation (動詞の變化)

動詞の形に主なるものが三つある 1. Root (語根), 2. Past (過去), 3. Past Participle (過去分詞) がそれで、これを Three Principal Parts of Verbs (動詞の三主要形) といふ。而してかういふ動詞の三主要素を示す事を Conjugation (動詞の變化) といふのである。今二三の例を示せば:

(語 根)	(過 去)	(過去分詞)
love (愛する)	loved	loved.
give (與へる)	gave	given.

以上の三主要形の外に Present participle (現在分詞) といふ形がある。これは語根に “ing” を付けて作るのである。例へば:

(語 根)	(現在分詞)
love (愛する)	loving.
give (與へる)	giving.
work (働く)	working.

諸君は Conjugation の例でお分りの事と思ふが、語根

から過去に變る時に “love” の様に、語尾に -ed を付けるのと、“give” の様に丸で變つた形になつて了ふのがある事に氣が附かれた事と思ふ。語根に -ed を付けて過去及過去分詞を作るものを Regular Verb (規則動詞) といひ、不規則に變化するものを Irregular Verb (不規則動詞) といふのである。

主なる不規則動詞

[A] 語根、過去、過去分詞の三つ共形が異なるもの。

(語 根)	(過 去)	(過去分詞)
be (ある)	{ was were	been
{ bear (擔ふ) bear (生む)	bore	borne born
begin (始む)	began	begun
blow (吹く)	blew	blown
break (破る)	broke	broken
choose (選ぶ)	chose	chosen
do (爲す)	did	done
draw (引く)	drew	drawn
drink (飲む)	drank	drunk
drive (逐ふ)	drove	driven

eat (食ふ)	ate	eaten
fall (落ちる)	fell	fallen
fly (飛ぶ)	flew	flown
forget (忘れる)	forgot	forgotten
give (與へる)	gave	given
go (行く)	went	gone
grow (生長する)	grew	grown
know (知る)	knew	known
lie (横はる)	lay	lain
ride (乗る)	rode	ridden
ring (鳴る)	rang	rung
rise (上る)	rose	risen
see (見る)	saw	seen
shake (振る)	shook	shaken
sing (歌ふ)	sang	sung
speak (語る)	spoke	spoken
steal (盗む)	stole	stolen
swim (泳ぐ)	swam	swum
take (取る)	took	taken
tear (裂く)	tore	torn
throw (投げる)	threw	thrown
wear (着る)	wore	worn

write (書く)	wrote	written
[B] 過去と過去分詞とが同形のもの。		
bind (縛る)	bound	bound
bite (噛む)	bit	bit
bring (持来る)	brought	brought
buy (買ふ)	bought	bought
catch (捕へる)	caught	caught
feel (感ずる)	felt	felt
fight (戦ふ)	fought	fought
find (見出す)	found	found
get (得る)	got	got
have (持つ)	had	had
hear (聞く)	heard	heard
hide (隠す)	hid	hid (hidden)
hold (保つ)	held	held
keep (支へる)	kept	kept
lay (横へる)	laid	laid
leave (去る)	left	left
lend (貸す)	lent	lent
lose (失ふ)	lost	lost
make (作る)	made	made
mean (思ふ)	meant	meant

meet (合ふ)	met	met
pay (拂ふ)	paid	paid
read (読む)	read	read
say (云ふ)	said	said
sell (賣る)	sold	sold
send (送る)	sent	sent
shine (輝く)	shone	shone
shoot (射る)	shot	shot
sit (坐る)	sat	sat
sleep (眠る)	slept	slept
spend (費す)	spent	spent
spin (紡ぐ)	spun	spun
stand (立つ)	stood	stood
sting (刺す)	stung	stung
strike (打つ)	struck	struck
sweep (掃く)	swept	swept
teach (教へる)	taught	taught
tell (語る)	told	told
think (考へる)	thought	thought
win (勝つ)	won	won
wind (捲く)	wound	wound

〔C〕 語根と過去分詞と同形のもの。

come (来る)	came	come
run (走る)	ran	run
cast (投げる)	cast	cast
cost (値↑)	cost	cost
cut (切る)	cut	cut
hit (當てる)	hit	hit
hurt (傷ける)	hurt	hurt
put (置く)	put	put
set (据ゑる)	set	set
shut (閉づる)	shut	shut

〔D〕 語根、過去、過去分詞共同形のもの。

Primary Tenses (基本時形)

動詞の表はす動作、状態などの「時」を英文法では Tense(時形)といふ。これには「……る(……である)」に當る Present(現在形)「……した(……であつた)」に當る Past(過去形)「……するであら(……であらう)」に當る Future(未来形)の三つの形があるが、之等を總稱して Primary Tense(基本時形)といふ。今“go”に就て例示すれば：

〔現在形〕 He goes to school.

= 彼は學校へ行く。

〔過去形〕 He *went* to school.
= 彼は學校へ行つた。

〔未來形〕 He *will go* to school.
= 彼は學校へ行くであらう。

現在形の作り方

主語が一人稱、二人稱の場合は語根を其儘用ひればよいが三人稱の單數の場合には語根に *-s* (又は *-es*) を付ける事は夢忘れてはならぬ。前の “go,” に就て例示すれば:

	(單)	(複)
一人稱	I go	We go
二人稱	You go	You go
三人稱	He } She } goes. It }	They go

併 “Be” といふ動詞は例外で次の様に變る。

	(單)	(複)
一人稱	I am	We are
二人稱	You are	You are

三人稱	He } She } is It }	They are
-----	--------------------------	----------

〔注意〕 主語が三人稱の單數の時は語根に *-s* (又は *-es*) を付けると前に云つたが、これを、複數の名詞に *-s* を付けることと混同してはならぬ。名詞では *-s* を付ければ複數になるのだが、動詞の場合では反對に單數(第三人稱)の時に *-s* を付けるのである。初學者は兎角これを誤解し易いから念の爲め斷はつておく。

過去形の作り方

過去形の作り方は極めて簡單で、人稱、數の關係なく過去の形を用ひればよい。同じく “go” を以て例示すれば:

	(單)	(複)
一人稱	I went	We went
二人稱	You went	You went
三人稱	He } She } went It }	They went

但し “Be” は例外で次の様に變化する。

	(單)	(複)
一人稱	I was	We were
二人稱	You were	You were
三人稱	He } She } was It }	They were

未來形の作り方

未來形の作り方は語根の前に、未來を表はす助動詞“shall;” “will” を付けるのである。第一人稱には“shall” を、第二、第三人稱には“will” を用ひることに注意せねばならぬ。

	(單)	(複)
一人稱	I shall go	We shall go
二人稱	You will go	You will go
三人稱	He } She } will go It }	They will go

〔注意〕 “shall;” “will” の様な助動詞を用ひたら、其次の動詞は常に語根の儘のものでなければならぬ。主語が三人稱の單數だからなどといつて、“He will goes” などとしていけない。此の事は後に「助動詞」の條で

も説くつもりである。

序に未來形の疑問を教へておかう。疑問でない場合と比較してその異なる點をよく注意せねばならぬ。

	(單)	(複)
一人稱	Shall I go?	Shall we go?
二人稱	Shall you go?	Shall you go?
三人稱	Will { he } go? she } it }	Will they go?

Perfect Tenses (完了時形)

動詞には、三つの基本時形の外に Perfect Tenses (完了時形) といふものがある。これにもこれから述べる三つの形があつて、夫々助動詞“have” の現在形、過去形、未來形に動詞の過去分詞を結合して作るのである。

1. Present Perfect Tenses (現在完了)

a) I have written my composition
already.

= 僕はもう作文を書いてしまった。

(b) I have visited the place once be-

fore.

=以前に一度其處へ行つた事がある。

(c) I have lived here for five years.

=彼はもう此處に五年住んでゐる。

〔解 説〕

現在完了は、形から云へば“have”過去分詞で、その用法は、(a)の如く「……して了つた」と動作の完了を示し、または(b)の如く「……したことがある」とこれの経験を示し、または(c)の如く、「……間……してゐる」「……から……してゐる」の様に繼續を示すものである。(a)の場合、單に詞作の完了に止まらず、その結果たる状態をも示すものであることを特に記憶せねばならぬ。“I have written my composition”と云へば「作文を書いて了つた」だから「作文が出来上がつてゐる」のである。

He has gone to England

=He is in England now.

=彼は英國へ行つて了つた=英國へ行つてゐる。

要するに現在完了は邦語でこそ「……した」と譯しは

するものの、これは現在の事を述べる Tense である、従つて、之と共に純然たる過去を表はす副詞を用ひる事は出来ない。例へば：

{ He has come yesterday. (誤)

{ He came yesterday. (正)

{ My father has gone to Kyoto last month. (誤)

{ My father went to Kyoto last month. (正)

但し“before”(以前に); “just”(丁度)の様に漠然と過去を示す副詞や、“this month;” “this year;” “today”の様に現在迄を含む副詞は此の限りに非ずである。

2. Past Perfect Tense (過去完了)

(a) I had written my composition when he came,

=彼が來た時にはもう作文を書終つてゐた。

(b) I had visited the place once before that time.

=その前に其處へ行つたことがあつたのだ。

- (c) I had lived there for five years.
 = その時には其處にもう五年住んでゐたのだ。

〔解説〕

過去完了は 過去のある時より以前に或る事柄が完了してゐることを表はすので、形は“had+過去分詞”である。上例に就て説明すれば、“had written”で「彼が来た」時より以前に作文が出来上つてゐた事を示してゐるのである。同時に此の Tense は、過去のある時からある時迄の「継続」「経験」を表はすので、(b)(c)は夫々それを示してゐるのである。つまり過去完了といふのは、現在完了へ過去を掛けた様なもので、現在完了は現在を舞臺にしてゐるに反し、過去完了は過去を舞臺にしてゐるのである。

3. Future Perfect Tense (未来完了)

- (a) I shall have written my composition by that time.
 = その頃迄には作文を書終へてゐるでせう。

- (b) I shall have visited the place several times when he first visits it.
 = 彼が始めて其處へ行く頃は私はもう何度も其處へ行つてゐることとせう。
- (c) I shall have lived here for five years by the end of this year.
 = 今年一杯で此處に五年住んでることになる。

〔解説〕

未来完了は、未来のある時迄に或る事柄が完了してゐる事を示すもので、形は未来を示す助動詞“shall;”“will”へ have + 過去分詞を結合したものである。上例を以て説明すれば、その時迄には作文が出来上がつてゐるだらう、さういふ意味を“shall have written...”で表はしてゐるのである。此の形は同時に (b)(c) の如く、未来のある時迄の「経験」「継続」をも示すに用ひられる。

Progressive Form (進行形)

- (a) I am reading a novel.
=私は小説を讀んでゐる。
- (b) I was reading a novel then.
=私は其時小説を讀んでゐた。
- (c) I shall be reading a novel when he comes.
=彼が來る時は私は小説を讀んでゐるでせう。

〔解 説〕

動詞には動作の繼續進行を示す形がある。即ち「……してゐる」「……しつゝある」等の意を表はす形である。これを Progressive Form (進行形) といふのであるが、その中 (a) の様に現在に於ける動作の繼續進行を示すものを Progressive Present (進行形現在); (b) の様に過去の場合のものを Progressive Past (進行形過去); (c) の様に未來の場合のものを Progressive Future (進行形未來) といふのである。そして之を作るには “Be + 現在分詞” を以てするのである。

併し此處に一つ注意せねばならぬ事は、どんな動詞

でも進行形になれるかといふこと、さうではない。凡そ動詞には「動作」を表はすものと「状態」を表はすものとある。即ち動作動詞と状態動詞とである。そこで進行形になれるのは動作動詞の方だけで、状態動詞は駄目である。例へば “know” (知る) といふ動詞は、状態動詞であるから “I am knowing him” などとは云へぬ、また “resemble” (似る) もその通り、「僕はあの人に似てゐる」なごを “I am resembling him” としては間違ひ、“I resemble him” と云はねばならぬ。此の事は極めて大切——殊に作文の上に——であるから忘れぬ様にしてもらひ度い。

話が横路へ入つたが、以上の三つの進行形の外に尙ほ次の三つがある。

〔進行形現在完了〕

I have been reading since morning.
=僕は今朝から讀書を續けてゐる。

〔進行形過去完了〕

I had been reading since morning.
=[その時は]朝から讀書を續けてゐた。

〔進行形未來完了〕

I shall have been reading for ten hours by three

o'clock.

=三時迄やれば十時間讀書を續けたことになる。

最後に注意すべき事は、進行形現在と、進行形現在完了とを混同せぬことである。前者は單に現在に於ける動作の進行繼續を示すに止まるが、後者は過去のある時（それが特に示してあるとないとに拘らず）から現在迄の動作の進行繼續を示すのである。進行形過去と進行形過去完了の関係も亦これと同様である。

Voice (態)

他動詞には「……する」さいふ働きを他にしかける形と同時に、「……される」といふ、即ち「受身」の形もある。この二つの變化を英文法では Voice (態) と呼んでゐる。

1. Active Voice (能動態)——これは主語が他に働きを及ぼす形である。

1. He taught me English.

=彼は私に英語を教へた。

2. The man killed a lion.

=その男は獅子を殺した。

2. Passive Voice (受動態)——これは主語が他

から動作を受ける形である。

1. I was taught English by him.

=私はあの人に英語を教へられた。

2. The lion was killed by the man.

=獅子はその男に殺された。

ところで、受動態を作るには助動詞“be”の色々に變化した形に過去分詞を附けるのである。今“teach”を例に取つて受動態の種々なる Tense を示せば：

I am taught	[現在]
I was taught	[過去]
I shall be taught	[未來]
I have been taught	[現在完了]
I had been taught	[過去完了]
I shall have been taught	[未來完了]

“He taught me English”の様に“me;”“English”の二つの目的語を有してゐる文を受動態に改める時には、其の目的語の一つは之の儘に保留されるものである。例へば：

[能動] He taught me English.

=彼は私に英語を教へた。

{ I was taught English by him.

[受動] { =私はあの人に英語を教へられた。

English was taught me by him.

=英語はあの人により私に教へられた。

以上の例でも分る通り、受動態に於ては動作の行爲者を表はすに“by”を用ひるのである。併し若し能動の主語が漠然たる意味を表はす語ならば、之を受動態に改める時省いても差支ない。例へば：

They teach German in that school.

=あの学校では獨逸語を教へる。

上例の“They”は普通の「彼等」さういふ明瞭なものではなく漠然とその学校の教職にある人達を指して居るのであるから、此の代名詞は受動態の場合には省いて：

German is taught in that school.

とすればよいのである。これと反對に“by”の附かない受動態の文を能動態に改める場合にも適當な主語を考へねばならぬ。例へば：

He has not been heard of since.

=其後彼のことに就て何の消息もない。

We have not heard of him since.

Only English must be spoken here.

=此處では英語しか話してはならぬ。

You must speak only English here.

Verbals (動詞變形)

動詞の變化したもので述語とならぬものを Verbal (動詞變形)といふ。之には、Infinitive(不定詞), Gerund (動名詞), Participle (分詞)の三つがある。

1. Infinitive (不定詞)

[い]

(a) To tell a lie is wrong.

(b) It is wrong to tell a lie.

=嘘をつくことは悪い。

[解 説]

不定詞といふのは語根に“to”の附いたもので、これは色々な品詞の役目を務めるが、先づ第一に名詞の働きをする。上例の“To tell”がそれで、これは「(嘘を)吐く事」といふ名詞の意を表はす。そして“To tell”は文の構造の上から云へば主語ですが、かやうに不定詞を主語の位置におく事は英語では多くの場合に避ける。その代りに“it”なる假りの主語をその位置において、本當の主語の“to tell”を後へ持つて來るの

である。さうした形が上例(b)である。意味はどちらでも變りはない。

〔ろ〕

- (a) Give him something to eat.
=彼に何か食べる物をやりなさい。
- (b) Not a soul was to be seen.
=人の影は一つとして見えなかつた。

〔解 説〕

次は不定詞が形容詞の役目をする場合の例で、上例(a)の“to eat”は「食べるべき」の意で前の“something”を形容してゐる。即ち「食べるべき何物か」「何か食物」である。(b)の“to be seen”も同様、これは受身で「見られるべき」の意。「一人として見られるべきはなかつた」が文字通りの譯で、結局「人つ子一人見られなかつた——見えなかつた」である。“to be seen”を一語の形容詞に換へれば“visible”である。

(は)

- (a) I went there to see the cherry-blossoms.
=私は櫻を見に其處へ行つた。
- (b) I am very glad to see you.
=君に會つて非常に嬉しい。
- (c) He lived to see his son a great man.
=生き永へて伴の出世を見た。

〔解 説〕

最後に不定詞は副詞の用をも成すものである。上例の“to see”は皆それで、(a)に於ては「何しに行つた——櫻を見に行つた」の様に“went”なる動詞を形容してをり、(b)に於ては、「何故嬉しい——君に會つたのが嬉しい」の様に“glad”なる形容詞を形容してをり、(c)に於ては、“lived”なる動詞を形容してをる。而して、“to see”は(a)に於ては「見に」の様に目的を表はし、(b)に於ては「會つて(嬉しい)」の様に「原因」を表はし、(c)に於ては「見る爲めに生きた」でなく、「生き永らへた、その結果……」の様に「結果」を表はしてゐる。(c)を書換へれば、“He lived and saw

his son……”となるのである。斯様に不定詞が副詞の如く用ひられる時は「目的」「原因」「結果」を表はす事に注意を要する。

2. Participle (分詞)

〔い〕

- (a) I am *learning* English.
=私は英語を學んでゐる。
- (b) I have *learned* English for three years.
=私は英語を三年間學んだ。
- (c) I was *taught* English by Mr. Smith.
=私はスミス氏より英語を教はつた。

〔解 説〕

Participle には前述の通り 現在分詞と 過去分詞とがあるが、現在分詞は上例 (a) の如く “be” (及其の變化) と結合して進行形なるものを作るに用ひられ、過去分詞は上例 (b) の如く助動詞 “have” と結合して所謂現在完了を作るに用ひられ、また (c) の如く, “be”

(及びその變化) と結合して受動態を作るに用ひられる。

〔ろ〕

- (a) He jumped on a *running* car.
=彼は走つてゐる電車に飛乗つた。
- (b) We had a *written* examination.
=筆記試験があつた。

〔解 説〕

現在分詞及び過去分詞はまた形容詞としても用ひられる。“*running car*” は「走つてゐる電車」, “*written examination*” は「口頭の試験」に對して「筆で書いた試験」=「筆記試験」さういふ様に。既に形容詞である以上は、上例の様に名詞の前に附くのは勿論、名詞の後へ來てもその名詞を形容する事が出来る。例へば:

- (a) Men *living* in town do not know rural pleasures.
=都會に住んでゐる人々は田園の樂を知らぬ。
- (b) This is a language *spoken* in Brazil.
=これはブラジルで話される國語である。

3. Gerund (動名詞)

(a) *Seeing is believing.*=見る事は信じる事である=見る
事が最も確かである。(b) *I could not help laughing.*

=私は笑ふ事を禁じ得なかつた。

〔解説〕

Gerund(動名詞)は形に於ては現在分詞と同じであるが、用法が全然異なる。現在分詞は“be”と結合して進行形を作り、又は形容詞の働きをするものであるが、動名詞は名詞と同様に用ひられるのである。併し同様に用ひられると云つても普通の名詞とは少々異なり幾らか動詞の氣があるので、冠詞は附けない。邦語で「育つ」といふ動詞から「育ち」といふ名詞が出来る一般である。動名詞を現在分詞と混同しない様重ねて注意する。

Auxiliary Verbs (助動詞)

〔い〕

(a) *Can you speak English?—No, I can not.*=君は英語が話せますか——否、
話せません。(b) *Can it be true? It can not be true.*=本當かしら。本當である筈がない。
い。

〔解説〕

助動詞には色々あるが、此處では最も普通に用ひられるものの用法を解く事にする。先づ第一に“can”であるが、これは上例(a)の様に「……する事が出来る」の如く「可能」を表はすのが第一の用法で、その反対「出来ぬ」は“can not”である。ところが、これには第二の用法がある。それは上例(b)に於けるが如く、「……する筈がない」「……である筈がない」の意を表はす場合である。つまり強い否定の推論を表はすのである。(b)の場合にしても、“It is not true”とすれば「それは眞實でない」丈けの意味だが、それを“*It can not be true*”とすれば「それは本當ではあり得ない」「本當の筈がない」「本當であつてたまるものか」と強い否定

になるのである。

“can”の過去は“could”で、その未来は——といふと、“can”には未来の形がない、それで形容詞で同じ意を表はす“able”をかりて来て、これに未来の助動詞“shall;”“will”を付けて表はすのである。例へば：

I shall be able to read it.

=私にそれが読める様になりませう。

You will be able to go there.

=君は其處へ行ける様になるだらう。

〔注意〕これから説明する助動詞は皆主語の人稱如何に依つてその形を變じないものだといふ事を記憶しておいて貰ひ度い。

〔ろ〕

(a) *May I go out?—No, you must not.*

=外へ行つて宜しいか——否、いけない。

(b) *He may or may not come.*

=彼は来るかも知れぬ。来ないかも知れぬ。

〔解説〕

“May”は第一に(a)の如く「……しても宜い」「……しても差支ない」と「許可」を表はす。其の反対「……してはならぬ」は、一寸考へるに“may not”の様
に思へるが、豈計らんや、それは“must not”で表はすのである。初學者は往々これを誤るから特に注意を要する。第二には(b)の如く「……かも知れぬ」に「推量」を表はす、この反対は“may not”である。

ところで“may”の過去は？ 第一の意味の時は“might”で、第二の場合には“may have + 過去分詞”といふ七面倒な形で表はす。例へば：

(a) *He said that I might go.*

=私は行つてもよいと彼が云つた。

(b) *He may have gone there.*

=彼は其處へ行つたかも知れぬ。

以上の外“may”にはもう一つの用法がある。それは「……せん事を祈る」に祈願を表はす場合である。例へば：

May you succeed!

=君の成功せられん事を祈る。

〔は〕

(a) *Must I go now?—No, you need not.*

=私は今行かねばなりませんか
——否、それには及ばぬ。

(b) *It must be false—It can not be true.*

=それは嘘に相違ない——本當の筈がない。

〔解 説〕

“Must” は第一に、上例(a)の如く「……ねばならぬ」と「必要」を表はす、その反對はうっかりすると“must not”などとやるが、それでは「……してはならぬ」の「禁止」になつて了ふ。此の意味の“must”の反對、即ち「……に及ばぬ」「……せずともよい」は“need not”である事に注意すべきである。

第二に“must”は「……に相違ない」「……に違ひない」と「推斷」を表はす。此の反對即ち「……の筈がない」は前述の“can not”である。

「……ねばならぬ」意の“must”は現在だけで、過去未來には用ひられない、それで未來には未來の助動詞

に“have to”を結合し；過去に“had to”を用ひる事になつてゐる。例へば：

I had to make a speech.

=私は演説をしなければならなかつた。

I shall have to serve in the army.

=僕は兵役に服さねばなるまい。

第二の意味の“must”は現在未來は變化がない。

例へば：

He must be dead.

=彼は死んだに相異なる。

He must succeed.

=彼は成功するに相違ない。

併し、「……したに相違ない」の様な過去には“must have + 過去分詞”の形を用ひて

He must have said so.

=彼はさう云つたに相違ない。

〔に〕

(a) *You ought to obey your parents.*

=お前は両親に従ふべきである。

(b) *You ought to succeed after all your efforts.*

＝お前はあれほど努力したのだから成功する。

〔解 説〕

“ought to”には二つの意味がある。第一は「……すべきである」「……するのが至當」の意味で、此の時は次に意志動詞が伴ふ。意志動詞とは自己の意志で左右し得る様な動作を表はす語、坐る、立つ、食ふなど皆それである。第二は「……するのは不思議でない」「あたり前」の意を表はす、この時は次に無意志動詞が伴ふ無意志動詞とは自己の意志で左右し能はぬ動作の語、例へば「病気になる」「成功する」「失敗する」など皆それである。“ought”の反対は“ought not”で、「……すべきものでない」「……するのは間違ひだ」の意を表はす。

(ほ)

(a) *Do you speak German.— No. I do not.*

＝君は獨逸語を話しますか——否
話しません。

(b) *I do know him, but I seldom visit him.*

＝あの人を知つてゐることは知つてゐるが、滅多に訪ねない。

〔解 説〕

“Do”は先づ一番に上例(a)の如く、「疑問」及「否定」の形を作るに是非共必要であらう、「君は知る」は“you know”だから、「君は知るか」は顛倒して“know you?”でよささうに思へるかも知れぬが、かういふ時英語では“Do”をかりて来て“Do you know?”の様にいふのである。“Do”は唯形を作る爲めのもので、それ自身には何の意味もない。だから「君は知りなすや」などと譯してはならぬ。「否定」の時も其通り、“I know not”とはせずに“*I do not know*”とするのである。

次に“do”は上例(b)に於ける如く、語勢を強める爲めにも用ひる。“I know him”よりも“*I do know him*”とした方が遙かに語勢が強まるのである。“do”の過去は“did”である事はいふまでもあるまい。先刻助動詞は主語の如何によつて形が變化しないと云つたが“do”は例外で、三人稱の單數が主語になれば“does”

に變るのである。

[へ]

- | |
|---|
| <p>(a) I will do anything for you.
=私は君の爲にはどんな事でもする。</p> <p>(b) I shall succeed this time.
=今度は成功するでせう。</p> |
|---|

[解 説]

未來を示す助動詞 “shall,” “will” に就ては大體「時制」の條で説明したが、此處ではもつと秩序立つて説明してみよう。元來未來には純粹の未來と、意志を含んだ未來とがある。「明日は雨が降るだらう」の様な場合は純粹な未來だが、「明日は……へ行く」の場合は未來であると同時にその人の意志が含まれてゐる。意志未來の場合は人稱の如何に拘らず何時でも “will” を用ひればよいから、この方は簡單であるが、純未來の方は人稱によつて或は “shall” を或は “will” を用ひたりするので初學者を迷はすこと一方でない。先づかう心得てゐればよい。一人稱には “shall” を、二

三人稱には “will” を用ひると。

I shall fail in the examination.

=僕は試験に落第するだらう。

You will fail in the examination.

=君は試験に落第するだらう。

He will fail in the examination.

=彼は試験に落第するだらう。

併しこれが疑問になるとまた様子が變つて來る。例

へば：

Shall I pass the examination?

=僕は試験に及第するでせうか。

Shall you pass the examination?

=君は試験に及第するでせうか。

Will he pass the examination?

=彼は試験に及第するでせうか。

以上は未來の疑問形だが、意志未來の場合は “will” とすればよい。“will I” は用ひられない。何故なればこれは自分の意志を他人に尋ねるこゝになるから。“will you” は相手の意向を聞く外、他人にもものを依頼する時に用ひる。「……してくれませんか、」に當るのである。

“shall;” “will” の用法は説明するにも骨が折れる位だから況して覚えるには並大抵の事ではない。併し此處に説明した位の事は十分呑込んでおいて貰ひ度い、詳しい事は諸君が此の本を卒業してから傳授する事にする。

ADVERB

(副 詞)

1. Simple Adverb (單純副詞)

- (a) He speaks English *well*.
=彼は英語をよく話す。
- (b) He can speak English *very well*.
=彼は非常によく英語を話す。

[解 説]

Simple Adverb (單純副詞)といふのは單に形容詞、動詞又は他の副詞を修飾するものである。上例(a)の“well”は「よく話す」さ、“speak”なる動詞を修飾し、(b)の“very”は「非常によく」の様に、副詞“well”を更に修飾してゐるのである。併し時としては名詞、代名詞、前置詞、接續詞を修飾する事もある。例へば：

- (a) *Even a boy can do it.*
=子供にさへそんな事は出来る。
- (b) *Even he does not know.*
=彼でさへそれを知らぬ。
- (c) *He always comes just at seven.*

=彼は何時も丁度七時に来る。

(d) A man is truly happy *only when* he is in good health.

=人間は健康の時だけ真に幸福である。

(a) の “even” は “a boy” を修飾し、(b) の “even” は “he” なる代名詞を、(c) の “just” は前置詞 “at” を、(d) の “only” は接續詞 “when” を修飾してゐるのである。

それから場合に依つては文章全體を修飾することもある。例へば：

Fortunately I found him at home.

=好い鹽梅に行つてみたら彼は在宅だつた。

上例は “I found …” 以下を全部修飾してゐる。之を書き直せば “It was fortunate that I found him at home” となるのである。次例を比較され度し。

(a) He showed me the way *kindly*.

=彼は親切に道を案内してくれた。

(b) He *kindly* showed me the way.

=彼は親切にも道を案内してくれた。

(a) の “kindly” は “showed” を修飾し、「道の教へ方が親切」の意であり、(b) の “kindly” は “He showed

me the way” 全體を修飾し、「道を案内してくれた事が親切」この意である。

2. Interrogative Adverb (疑問副詞)

(a) *When* did he leave Tokyo?

=何時彼は東京を立ちましたか。

(b) *Where* shall we go to-morrow?

=明日は何處へ行かうかね。

(解 説)

Interrogative Adverb (疑問副詞)といふのは疑問文に用ひる副詞のことで其の種類は色々ある。上例はその一部分に過ぎない。尙他の例を挙げようなら：

What time do you get up?

=何時に起床しますか。

How did you do that?

=どういふ風にしてそれをやりましたか。

Why did you strike me?

=何故私を殴りましたか。

3. Relative Adverb (關係副詞)

(a) I don't know [the time] *when* he

arrived.

=あの人が何時到着したか、私は
知らない。

(b) He asked us [the place] *where* we
went.

=彼は吾々の行つた處を聞いた。

〔解 説〕

Relative Adverb (関係副詞) といふのは、副詞であつて同時に接續詞の役目を兼ねたものを云ふのである。上例(a)の“when”を見るに、これは「何時」といふ意味を表はす副詞であつて、同時に“*I don't know*”なる一部分と、“*he arrived*”なる一部分とを接ぎ合せてゐるのである。(b)の“*where*”も同様、「何處へ」といふ意味の副詞であつて、同時に“*He asked us*”と“*we went*”の二つの部分を結び付けてゐるのである。ところで、“*when*”“*where*”の前にある“*the time;*”は先行詞といふものであるが、これは多くの場合省いて差支ないのである。

以上の例の外疑問副詞は皆関係副詞として用ひられるのである。例へば：

Do you know [the reason] *why* he is so late ?

=あの人があんなに遅い理由を知つてますか。

Tell me *how* he did it.

=あの人があつてさうしたか聞かせなさい。

副詞の比較

副詞にも形容詞と同じやうに Comparison (比較) の變化がある。そして其の作り方も形容詞の場合と變りがないのである。二三の例を挙げれば：

(原 級)	(比較級)	(最上級)
hard (精出して)	harder	hardest
fast (速かに)	faster	fastest
well (よく)	better	best
early (早く)	earlier	earliest

副詞の普通の形

副詞は形容詞に *-ly* を付けて作ることが度々ある。但し *-ly* が附いてゐるからとて必ずしも副詞とは限らない。形容詞それ自身が *ly* で終つてゐるのがあるから。次に形容詞と副詞のあるものとを比べてみよう。

(形 容 詞)	(副 詞)
easy (容易な)	*easily (容易に)
slow (のろい)	slowly (のろく)

idle (怠惰な)	*idly (怠惰に)
kind (親切な)	kindly (親切に)
quick (速かな)	quickly (速かに)
noble (高尚な)	*nobly (高尚に)

【注意】 *印に就ては語尾の變化に注意され度し。

形容詞と同形の副詞

ところが此處に、形容詞と全然同形の副詞がある。
その主なるものを列挙すれば：

(形容詞)	(副詞)
fast (速かな)	fast (速かに)
early (早い)	early (早く)
hard (刻明な)	hard (刻明に)
far (遠い)	far (遠く)
low (低い)	low (低く)
much (澤山の)	much (非常に)
enough (十分な)	enough (十分に)

文中にあつて此等を區別するには前後の關係によつて分る。形容詞と副詞の本分を辨へておればその識別は決して困難でない。

注意すべき副詞

1. "Yes" と "No"

ある問に對して「然り」の意味で "Yes," 「否」の意味で "No" を用ひる。此等は矢張り副詞であるが、その用法を誤る場合があるから一寸注意をして置く。問が肯定の場合には間違ひはないが、否定疑問の場合には邦語と正反對で、邦語で「然り」と云ふ場合に英語では "No" と云ひ、邦語で「否」といふ場合に英語では "Yes" といふから餘程注意してかからないと飛んでもない失敗をやる。邦語では問の言葉が肯定なるを否定なるとによつて "Yes," "No" が違ふが、英語では問が肯定であらうと否定であらうと、そんな事には頓着なく、肯定の答をしようと思へは何時も "yes" を、否定で答へようと思へば何時でも "No" を用ひればよい。次例を参考して篤とそこを會得せられ度い。

a) Is he old?

=あの人は年を取つてゐますか。

Yes, he is old.

=ハイ、年を取つてゐます。

No, he is not old.

=イエ、年を取つてません。

(b) Is he not old?

=あの人は年寄ではありませんか。

Yes, he is old.

= いえ, 年寄りです。

No, he is not old.

= え, 年寄りではありません。

2. “Very” と “Much”

“very” も “much” も共に「非常に」「甚だ」の意味だが、前者は形容詞及び副詞の原級に用ひ、後者は動詞を形容するに用ひる、例へば：

{ I am *very* fond of it.
I like it *much*
= 私は非常にそれが好きだ。

上にも断つた通り “very” を用ひるのは形容詞(及び副詞)の原級に對してであつた。比較及び最上級の時は “much” を用ひる。次例を比較：

{ This is *very* good.
= これは非常によい。
This is *much* better than that.
= これはそれよりずっとよい。

また現在分詞形の形容詞には “very” を、過去分詞形のものには “much” を用ひる。

{ This book is *very* interesting.

= 此の本は非常に面白い。

{ I am *much* interested in the study of languages.

= 私は語學の研究に非常に興味をもつてゐる。

3. “There”

“There” には「其處に」といふ意味は勿論あるにはあるが物(又は人)の存在を示す場合の “There is……” の “There” には大した意味はない。唯「……がある」「……がない」を表はす一つの形式である。だから一々「其處に」と譯すには及ばぬ。

There is a book on the desk.

= 机の上に本がある。

There is no ink in the bottle.

= 瓶の中にインキがない。

だから、若し「其處に」といふ意味を加へようとするれば文の終りに別に “There” を置かねばならぬ。

There is a school *there*.

= 其處には學校がある。

CONJUNCTION

(接 續 詞)

1. Co-ordinate Conjunction

(等 位 接 續 詞)

- (a) I have a brother *and* a sister.
= 僕には兄と姉がある。
- (b) Taro is diligent, *but* Jiro is idle.
= 太郎は勤勉だが、次郎は怠惰だ。

〔解 説〕

接續詞とは、語と語、句と句、節と節を接合するものであるが、その中文法上對等の語、句、節を接續するものを Co-ordinate Conjunction (等位接續詞)といふのである。上例 (a) の “and” は “a brother” と “a sister” といふ語を結合してゐるのだが、“a brother” と “sister” は此の場合文法上對等の位置にあるのである、何れが主、何れが従とも云ひ兼ねる、五分五分の重要さを持つてゐるのである。また、(b) の “but” は “Taro is diligent” なる節と、“Jiro is idle” なる節を

結合してゐるのだが、これとても同様、二つの節に主従、上下の區別はない。“Taro is diligent” といふ文句も大切なれば “Jiro is idle” といふ文句も同様に大切なのである。斯様な場合に用ひられる “and;” “but” が所謂等位接續詞なのである。

2. Subordinate Conjunction

(從 屬 接 續 詞)

- (a) I know *that* he is honest.
= 僕は彼が正直である事を知つてゐる。
- (b) He is honest, *though* he is poor.
= 彼は貧乏であるが、正直だ。

〔解 説〕

Subordinate Conjunction (從屬接續詞)とは、主たる節に從屬的の節を結合する役目の接續詞である。と云つただけでは解らぬかも知れないが、(a) の “that” は、“I know” といふ節と、“he is honest” といふ節を結合してゐる、それはお分りでせう。ところで、此の二つの節を比較研究してゐると、其處に主従の別が表は

れる。さてどちらが主で、どちらが従だらう？ 勿論 “I know” が主で、“he is honest” は従である。

前の定義に「主たる節」「従屬的節」と云つたのは此の事である。次に (b) の “though” は如何？ これは “He is honest” と、“he is poor” の兩節を結合してゐるが、何れが主で何れが従かと云へば “He is honest” が主で、“he is poor” は従である。「彼は正直だ」といふのが主眼で、「貧乏だ」といふのは云はば附けたりである。上例だけで見ると諸君は、かう思ふかも知れない：かういふ接續詞のある時は何時も文章の左項が主節で、右項が従屬節だと。併しそれは誤解である。上例 (b) の如きは左と右との位置を換へて、次の様にも云へるのだから。

Though he is poor, he is honest.

上例の外、此の種に屬する接續詞に次の様なものがある。

If you wish, I will go with you.

= 君が望みなら一緒に行かう。

The train started before I had got to the station.

= 停車場へ着かない中に汽車が出た。

Let us wait until he comes.

= 彼の來るまで待たう。

He as well as you is to blame.

= 君ばかりでなく彼も悪いのだ。

Tell me when he comes.

= 彼が來たら云つて呉れ。

He succeeds because he perseveres.

= 彼は忍耐するから成功する。

I will not go, for I have a headache.

= 僕は行かない、頭が痛いから。

〔注意〕 “because” も “for” も「何故なれば」の意味だが、“why …… ?” といふ疑問に對して答へる場合には “for” を用ひずして “because” を用ひる。

PREPOSITION

(前置詞)

(a) The book is *on* the table.

= その本は卓子の上にある。

(b) I went *to* Osaka *with* my father.

= 私は父と大阪へ行つた。

(解説)

Preposition (前置詞) は、名詞や代名詞の前に置いて他の語との関係を示すもので、その名詞又は代名詞を前置詞の目的語といふ。上例(a)の“on”は“book”と“table”との位置の関係を示すものであり、(b)の“to”は“went”と“Osaka”の関係、“with”は“went”と“my brother”との関係を示してゐるのである。

前置詞は邦語の「てにをは」に相當するものだが、その数は「てにをは」どころでなく、中々多い。且つ動詞や形容詞には夫々其次に伴ふ前置詞が一定してゐるし、同一語でも種々の前置詞が附いて皆異つた意味を表はすから非常に面倒なものであるが、此處では主な、普通使用されてゐる前置詞を掲げることにする。

主なる前置詞

1. I get up *at* six *in* the morning.
= 私は朝六時に起きます。
2. I was born *on* the second of May.
= 私は五月の二日に生れた。
3. We have much rain *in* June.
= 六月には雨が多い。
4. A big earthquake occurred *in* 1923.
= 一九二三年に大地震があつた。
5. He arrived *in* Japan *on* the evening of January 5th.
= 氏は一月五日の夜日本に着いた。
6. I arrived *at* Nara *in* the afternoon.
= 私は午後奈良へ着いた。
7. The building will be completed *in* a month.
= その建築は一ヶ月で竣工します。
8. Do this work *within* a week.
= 此の仕事を一週間以内にせよ。
9. He stayed with us *for* a fortnight.
= 彼は二週間私共の處に滞在しました。
10. Where did you stay *during* the vacation?
= 休暇中は何處にりましたか。

11. He has been ill *since* last Monday.
= 彼は去月曜以來病氣である。
12. I will finish it *by* to-morrow morning.
= 明日の朝迄にそれを仕上げます。
13. Stay here *till* evening.
= 夕方まで此處にゐらつしやい。
14. He left *for* Europe yesterday.
= 氏は昨日歐洲へ出發した。
15. This table is made *of* wool.
= 此の卓子は木で出来てゐる。
16. Sake is made *from* rice.
= 酒は米から造る。
17. He ran *out of* the house.
= 彼は戶外へ飛び出した。
18. He was absent *because of* illness.
= 彼は病氣の爲め欠席した。
19. There is a pine-tree *in front of* the house.
= 家の前に松の樹がある。
20. A pronoun is used *in stead of* a noun.
= 代名詞は名詞の代りに用ひられる。
21. He is stingy *in spite of* his wealth.
= 金があるにも拘らず吝嗇だ。

〔註〕 以上の諸例中, “arrive in” は London, New-York, Tokyo, Japan の様な廣い所に用ひ, “arrive at” は狭い所に用ひる。普通に「午前」「午後」「夜」といふ時は “in” だが, 特別の日の「午前・午後・夜」には例(5)の如く “on” 用ひる。“because of;” “in front of;” “in stead of;” “in spite of” など二語以上より成る前置詞を Phrase Preposition (句前置詞)と云ふ。

誤り易き前置詞

“in” と “within”

“in” は、「(何日)経つて」「(何日)で」の様に時の経過點を示すのであり, “within” は「(何日)以内」「(何日)経たぬ中」の意に用ひるのである。

{	I will finish it <i>in</i> a week.
	= <u>一週間</u> でそれを仕上げます。
{	I will finish it <i>within</i> a week.
	= <u>一週間以内</u> でそれを仕上げます。

“for” と “during”

“for” は「(何日)間」の意, “during” は或る繼續する期間中の意。

He was in America *for* three years.

=彼は米國に三ヶ年間ゐた。

He learned nothing *during* his stay abroad.

=彼は洋行中何一つ覺えたものはない。

“by” と “till”

“by” は「……までに……する」の様に動作又は状態の完了を示し, “till” は「……まで……する」の様に動作又は状態の繼續を表はす。

He will be here *by* evening.

=彼は夕方迄には此處へ來るでせう。

He will stay here *till* evening.

=彼は夕方迄此處にゐるでせう。

“for” と “to”

何れも場所に用ひる場合は「……へ」の意味だが, “for” は出發地點を基にして「……へ(立つ)」の様に用ひ, “to” は到着地點を主にして「……へ(着く)」の様に用ひる。

He left Japan *for* England.

=彼は英國へ向け日本を立つた。

He went *to* England.

=彼は英國へ行つた。

“between” と “among”

どちらも物に狭まれた「間」を意味するが, “between” は二つ(又は二人)の間に, “among” は三つ(又は三人)以上の間に用ひる。

He divided the money *between* his two sons.

=彼は二人の子供にその金を分けた。

He divided the money *among* his three daughters

=彼はその金を三人の娘に分けた。

“over” と “above”

“over” も “above” も物の表面を離れて「上の」意であるが, “over” は「眞上」であり, “above” は漠然と「上方」の意である。

“under” と “below”

こちらも「下」の意だが, “under” は「眞下」の意で丁度 “over” の反對, “below” は「下方」で丁度 “above” の正反對である。

INTERJECTION

(間投詞)

- (a) *Oh, how glad I am!*
= あゝ、ほんとに嬉しい。
- (b) *Alas! he is dead.*
= あゝ、彼は死んでしまった。

〔解説〕

Interjection (間投詞)は唯強い感情を表はす叫び聲に過ぎない、そして文中何れの語にも文法上の関係なく、勝手に文中へ挿むものである。「間投詞」といふ名前が附くのもその爲めである。「強い感情」といつても種々ある。それを分類して各々その例を示せば：

- 〔喜〕 Hurrah! Huzza! Oh!
- 〔笑〕 Ha! ha! Aha!
- 〔悲〕 Alas! Ah! Oh!
- 〔驚〕 Hoh! What? Why! Dear me!
- 〔疑〕 Hum! Hem!
- 〔嘲〕 Pooh! Ishaw! Thut-tut! Fie.

〔賞〕 Bravo! Well done! Hear! hear!

〔人の注意を引く時〕 Look! Lo! Behold! Hark!

Hush!

〔人を呼掛ける時〕 Ho! Hallow! Ahoy!

〔文例〕

1. *Ah, it is too late now.*
= ああ、今ちやもう遅い。
2. *Dear me! My purse is gone.*
= これはしたり、財布がない。
3. *Hark! the bell is ringing.*
= あれ、鐘が鳴つてゐる。
4. *Lo! he is coming.*
= そら御覽、大將やつて来るぞ。
5. *Hush! Some one is coming.*
= しッ、誰かが来る。

練習篇

— 名 詞 —

(い) 次の名詞の複数を作れ。

- | | | |
|-----------------------|---------------------|----------------|
| 1. clock (時計) | 2. branch (枝) | 3. glass (コップ) |
| 4. way (道) | 5. tooth (歯) | 6. mouth (口) |
| 7. child (子供) | 8. woman (女) | 9. country (國) |
| 10. bush (藪) | 11. army (軍隊) | 12. shoe (靴) |
| 13. church (教會) | 14. monarch (君主) | |
| 15. handkerchief (手巾) | 16. roof (屋根) | |
| 17. thief (窃盜) | 18. son-in-law (養子) | |
| 19. leaf (葉) | 20. sheep (羊) | |

- [答] 1. clocks. 2. branches 3. glass. 4. ways.
 5. teeth. 6. mouths. 7. children. 8. women.
 9. countries. 10. bushes. 11. armies. 12. shoes.
 13. churches. 14. monarchs 15. handkerchiefs.
 16. roofs. 17. thieves. 18. sons-in-law.
 19. leaves. 20. sheep.

(ろ) 次の文中の名詞を複数とし、動詞其他を適當に変更せよ。

1. He gave me a pretty picture. (彼は私に美しい繪をくれました。)
2. The policeman has caught a robber. (巡査が泥棒を捕へた。)
3. The bird begins chirping again. (鳥は再び囀り始める。)
4. The table was covered with a cloth of dazzling white. (食卓は眩しいほど白い布で蔽はれてゐた。)
5. What a lovely child she is! (何て可愛らしい女の子だらう。)

- [答] 1. He gave me pretty pictures.
 2. The policemen have caught robbers.
 3. The birds begin chirping again.
 4. The tables were covered with cloths of dazzling white.
 5. What lovely children they are!

(は) 次の文中の誤を正せ。

1. Are your brother ill! (兄さんは御病氣ですか。)
2. I have read all the book on that shelf. (私はあの棚の上の本を皆讀んで了つた。)
3. Mr. Jones has a great many firend. (ジョーンズ氏は友人が非常に澤山ある。)

4. these pieces of wood is not worth much.
(此等の木片は大し価値はない。)
5. He landed and went to the kings' palace.

[答] 1. Is your brother ill?

2. I have read all the books on that shelf.
3. Mr. Jones has a great many friends.
4. These pieces of wood are not worth much.
5. He landed and went to the king's palace.

(に) 次の文中の名詞の格を言へ。

1. Have they a father? (彼等には父がありますか。)
2. There are many chairs in this room. (此の室には澤山椅子がある。)
3. He lent his book to the friend. (彼は本を友人に貸した。)
4. She bought it at Mitsukoshi's. (彼女はそれを三越で買った。)
5. The dog knows his master's voice. (犬は主人の聲を知つてゐる。)

[答] 1. "father" は目的。 2. "chairs" は主格。
3. "book" は自的格、"friend" も目的格。
4. "Mitsukoshi's" は所有格。

5. "dog" は主格, "master's" は所有格, "voice" は目的格。

(ほ) 次の文を英譯せよ。

1. 私の兄は丸善で其本を買ひました。
2. 君に面白い話をして上げよう。
3. 父は昨日の新聞を讀んでゐる。
4. その米國人は目下帝國ホテルに滞在してゐる。
5. 彼は大きくなつたら政治家になるといつてゐます。

[答] 1. My elder brother bought that book at Maruzen.
2. I will tell you an interesting story.
3. Father is reading yesterday's paper.
4. The American is staying at the Imperial Hotel.
5. He says that he will be a politician when he grows up.

— 代 名 詞 —

(い) 次の文中の代名詞の種類を問ふ。

1. Which of these will you take? (此等の中どれをお取りになりますか。)
2. This is the watch that I lost. (これは僕が失くし

た時計だ。)

3. Your cap is old and so is mine. (君の帽子は古い
が僕のもさうだ。)

4. A pair of birds once came to our fields. They had
never built a nest nor seen a winter.

(一つがひの鳥が或る時私等の畑へ来た。彼等は
巢を造つたこともなく、冬にも會つた事がなか
つた。)

5. What is the matter with you? I have a sore throat,
and my back aches.

(どうかなさいましたか、私は咽喉が痛んで背中
がづきづきします。)

[答] 1. "which" = 疑問代名詞 "there" = 形容代
名詞, "you" = 人稱代名詞。 2. "This" = 形容代名
詞, "that" = 關係代名詞。 3. "Your" = 所有格代名
詞, "mine" 所有代名詞。 4. "our" = 所有格代名詞。
"they" = 人稱代名詞。 5. "what" = 疑問代名詞。
"I" = 人稱代名詞。 "my" = 所有格代名詞。

(ろ) 次の文中の代名詞の格を問ふ。

1. They say that there will be no war. (戦争等ない
さうです。)

2. He will give them to you. (彼は君にそれを呉れる
でせう。)

3. How far is it from here to the station. (此處から
停車場迄どの位ありますか。)

4. He told us an interesting story. (彼は私達に面白
い話をしてくれました。)

5. It is their fault. (それは彼等の過失です。)

[答] 1. "they" = 主格。 2. "he" = 主格。 "them"
目的格。 "you" = 目的格。 3. "it" = 主格。 4. "he"
= 主格。 "us" = 目的格。 5. "it" = 主格。 "their"
所有格。

(は) 次の空所に適當なる代名詞を補へ。

1. — is very warm to-day. (今日は頗る暖い。)

2. Will — not give me that book of —?
(その—の本を下さいませんか。)

3. — was hard for Columbus to keep the sailors from
turning the ship towards home.

(水夫等が船を本國の方へ向けようとするのを
防ぐのはコロンバスには困難だつた。)

4. He went to fight for — country. Many brave men
went with — to fight the foes of — country.

(彼は——の國の爲めに戦ひに赴いた、數多の勇士は——の國敵と戦ふ爲めに——と共に行つた。)

5. I will send —— a photograph of ——.

(僕は——の寫眞を——に送ませう。)

6. —— say that he will return home soon.

(彼はよやがて歸國する相です。)

7. —— three weeks since —— came.

(——が此處へ來てから三週間になる。)

8. I saw —— making a picture of ——.

(僕は——が——の肖像を描いてゐるのを見た。)

[答] 1. *It is very warm to-day.*

2. *Will you not give me that book of yours?*

3. *It was hard for Columbus to*

4. *He went to fight for his country. Many brave men went with him to fight the foes of their country.*

5. *I will send you a photograph of myself.*

6. *They say that he will return home soon.*

7. *It is three weeks since he came.*

8. *I saw him making a picture of me.*

(に) 次の文を英譯せよ。

1. *これが昨日御話した人です。*

2. *彼には自分の家がない。*

3. *彼は私の友人です。*

4. *君が悪いので私が悪いのではない。*

5. *私の此の家は私には好過ぎる。*

6. *此の三年來あの人に會はない。*

7. *さう云つて其男は其の場を去つた。*

8. *出席した人は皆その演説で感動した。*

9. *君のあの帽子は私のより古いね。*

10. *通りで親類に會つた。*

[答] 1. *This is the person of whom I spoke to you yesterday.*

2. *He has no house of his own.*

3. *He is a friend of mine.*

4. *It is your fault, not mine.*

5. *This house of mine is too good for me.*

6. *I have not seen him these three years.*

7. *With that he left the place.*

8. *Those who were present were moved by his speech.*

9. *That cap of yours is older than mine.*

10. *I met with a relative of mine in the street.*

— 形容詞 —

(い) 次の形容詞の比較を作れ。

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. sad (悲しい) | 2. safe (安全な) |
| 3. few (少数の) | 4. busy (忙しい) |
| 5. pretty (美しい) | 6. heavy (重い) |
| 7. useful (有益な) | 8. far (遠い) |
| 9. merry (楽しい) | 10. idle (怠慢な) |

- [答] 1. sadder, saddest. 2. safer, safest.
 3. fewer, fewest. 4. busier, busiest.
 5. prettier, prettiest. 6. heavier, heaviest
 7. more useful, most useful.
 8. farther (further), farthest (furthest).
 9. merrier, merriest. 10. more idle, most idle.

(ろ) 次の文を英訳せよ。

1. この問題はそれよりは容易い。
2. 金剛石は最も硬い鉱物です。
3. 此の小説は三つの中で一番面白い。
4. エトナ山は高さ一萬八百呎で、富士山より千五百呎許り低い。
5. 家屋の四分の三は火事で焼けました。

6. 彼は先月の十五日に日本に來ました。そして三週間私方に滞在しました。
7. 私の祖父は今年九十七歳ですが、未だ達者なものです。
8. 今度の震災で十萬の死者がありました。
9. 私の兄は第一中學校の五年生です。
10. 二時四十五分發の列車に乗りませう。

- [答] 1. This problem is easier than that one.
 2. Diamond is the hardest of all minerals.
 3. This novel is the most interesting of the three.
 4. Mt. Etna is 10800 feet high, and is lower than Mt. Fuji by 1500 feet.
 5. The three-fourths of the building was reduced to ashes by the fire.
 6. He came to Japan on the 15th of last month, and stayed with us for three weeks.
 7. My grandfather is 97 years old, and yet he is very strong.
 8. About 20000 people were killed in the recent earthquake disaster.
 9. My elder brother is in the fifth-year grade of the First Middle school.

10. Let us take the 2.45 train.

— 動 詞 —

(い) 次の動詞の過去及び過去分詞の形を問ふ。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. bind (縛る) | 2. break (破る) |
| 3. rise (上る) | 3. cost (値す) |
| 5. hear (聞く) | 6. lose 失ふ) |
| 7. speak (語る) | 8. shut (閉ぢる) |
| 9. buy (買ふ) | 10. go (行く)。 |

- [答] 1. bound, bound. 2. broke, broken.
 3. rose, risen. 3. cost, cost.
 5. heard, heard. 6. lost, lost.
 7. spoke, spoken. 8. shut, shut.
 9. bought, bought. 10. went, gone.

(ろ) 次の文を英譯せよ。

1. 君は鯨を見たことがありますか。
2. 私が停車場に着いた時に汽車は出發して了つてゐた。
3. 四時迄には其本を読み終つてゐるでせう。
4. 私は英語を三年間學びました。
5. 田中君は十年間東京に住んでゐる。

[答] 1. Have you ever seen a whale?

2. The train had started already when I arrived at the station.

3. I shall have finished reading the book by four o'clock.

4. I have learned English for three years.

5. Tanaka has lived in Tokyo for ten years.

(は) 次の文中の voice を改めよ。

1. He caught a big fish. (彼は大きな魚を捕まへた。)

2. He called me a fool. (彼は私を馬鹿と云つた。)

3. Everybody likes him. (皆彼を好む。)

4. Names are given to different parts of the land.

(名が陸のそれぞれの部分に與へられてある。)

5. Mr. Yamada lent me this book.

(山田君が此の本を私に貸してくれた。)

[答] 1. A big fish was caught by him.

2. I was called a fool by him.

3. He is liked by everybody.

4. They give names to different parts of the land.

0. { This book was lent me by Mr. Yamada.

 { I was lent this book by Mr. Yamada.

(に) 次の文中の不定詞の用法を問ふ。

1. He likes to read this book. (彼は此の本を読むのが

好きです。)

2. I am very sorry *to trouble* you. (御迷惑をかけてすみません。)
3. *To be good is to be happy.* (善である事は幸福である事だ。)
4. He began *to write* his composition. (彼は作文を書き始めた。)
5. There is no chair *to sit on* in this room. (此の室には坐る椅子がない。)
6. We have not a moment *to lose.* (一刻も失つてはならぬ。)
7. I have come *to tell* you this. (私はその事で告げに来たのです。)
8. She ran *to meet* her father. (彼女は父を迎へに走つて行つた。)

[答] 1. 名詞代用。 2. 副詞代用。 3. 名詞代用 (両方共)。 4. 名詞代用。 5. 形容詞代用。 6. 形容詞代用。 7. 副詞代用。 8. 副詞代用。

(ほ) 次の文中の空所に *can, may, must* を適当に入れよ。

1. I — not help it. (それは止むを得ない)。

2. You — be very tired. (君は大層疲れてゐるに相違ない。)
3. He — be ill. (彼は病氣かも知れません。)
4. We eat that we — live. (吾々は生きんが爲めに食べる。)
5. He — have arrived there. (彼は彼處に着いたに相違ない。)
6. You — ask me any question you like.
(何でも好きな質問をして宜しい。)
7. — I use red ink? No, you — not.
(赤インキを使つてもいいですか。いや、いけません。)
8. Our teacher — not be less than thirty.
(吾々の先生は三十以下の筈はない。)

[答] 1. *I can not help it.*

2. You *must* be very tired.
3. He *must* be ill.
4. We eat that we *may* live.
5. He *must* have arrived there.
6. You *may* ask me any question you like.
7. *May* I use red ink? No, you *must not*.
8. Our teacher *can not* be less than thirty.

(へ) 次の文を英譯せよ。

1. 子供は両親に従ふべきである。
2. 田中さんは土曜の午後青森に向つて出發します
3. 私は彼を見送りに停車場に行くつもりです。
4. 君はそんな長い手紙を書くに及ばない。
5. 彼は英語をうまく話せるのも當然だ、英國に十年以上もゐたのだもの。

- [答] 1. Children should obey their parents.
2. Mr. Tanaka will start for Aomori on Saturday afternoon.
 3. I will go to the station to see him off.
 4. You need not write such a long letter.
 5. He ought to be able to speak English well, for he has been in England for more than ten years.

— 副 詞 —

次の文を英譯せよ。

1. そんな早口に云はないで下さい。も少しのろく話が出来ませんか。
2. 彼は朝早く起きる事を例としてゐる。
3. 此のナイフを使つても宜しいですか。宜しいで

すとも。

4. 多分彼は来るでせう。
5. よく英語が話せるといいがな。
6. 彼は今日上京しました、明日は横濱へ参るさうです。
7. 彼は到る處で歓迎されました。
8. 太陽がきらきらと輝いてゐる。
9. 彼に逢ふ事が出来ないだらう。
10. もつと勉強をなさい、さもないと落第しますよ。

- [答] 1. Don't speak so fast. Can't you speak a little more slowly?
2. He makes it a rule to rise early in the morning.
 3. May I use this knife? Yes, certainly.
 4. Perhaps he will come.
 5. I wish I could speak English well.
 6. He came up to Tokyo yesterday. He will go to Yokohama to-morrow.
 7. He was welcomed everywhere he went.
 8. The sun is shining brightly.
 9. I shall be unable to see him again.
 10. Study harder, or you will fail.

— 接 續 詞 —

次の空所に適當なる接續詞を入れよ。

1. Work hard — you are young. (若い——精出して働け。)
2. — father — mother can go. (——父——母共に行けます。)
3. Is that book thick — thin? (その本は厚いのですか。薄いのですか。)
4. They had all gone out — I called at their house. (あの人達は僕が家を訪ねた——皆不在でした)
5. I asked him — the news was true — not. (僕は彼にその知らせが本當——を尋ねました)
6. They say — he will come back soon. (皆は彼が程なく歸つて来る——と云つてゐます。)
7. — he is ill, he cannot come. (彼は病氣だ——來られません。)

[答] 1. "while," 2. "both"; "and" 3. "or"
4. "when" 5. "whether" "or" 6. "that"
7. "As"

— 前 置 詞 —

(い) 次の文中の空中に適當なる前置詞を入れよ。

1. There is a pond — the house. (家の——に池がある。)
2. He went to Ueno — — Hibiya. (彼は日比谷——上野へ行つた。)
3. You will hear — him — a few days. (二三日——彼——便りがあるでせう。)
4. He left Kobe — Shanghai — the third — August. (彼は八月——三日——, 上海——神戸を立ちました。)
5. I will start — Wednesday morning. (僕は水曜の朝——出發します。)
6. There are many volcanoes — Japan. (日本——澤山の火山がある。)
8. What have I — my hand? (僕の手——何かありますか。)
8. The box is made — wood. (箱は木——出來てゐる。)

[答] 1. There is a pond *behind* the house
2. He went to Ueno *instead of* Hibiya.
3. You will hear *from* him *in* a few days.
4. He left Kobe *for* Shanghai *on* the third *of* August.
5. I will start *on* Wednesday morning.

6. There are many volcanoes *in* Japan.
7. What have I *in* my hand?
8. The box is made *of* wood.

(ろ) 次の文を英譯せよ。

1. 私の伯父は先月末に上京しました。
2. 私は病氣の爲め會を缺席した。
3. 明日の午後までに此の仕事をすまして下さい。
4. 學校から歸る途中で彼の家を訪問しました。
5. 彼は病氣にも拘らず式に參列した。

- [答] 1. My uncle came up to Tokyo at the end of last month.
2. I absented myself from the meeting on account of illness.
 3. Please finish this work by to-morrow afternoon.
 4. I called at his house on my way home from school.
 5. He attended the meeting in spite of his illness.

— 問 投 詞 —

次の文を英譯せよ。

1. あれ、半鐘が鳴つてゐる。
2. ああ、もう彼に會ふ事は出来ない。

3. おやおや、屋根がもるぞ。
4. しつ、赤ん坊が寝てるから。
5. 萬歳、僕の勝ちだぞ。

- [答] 1. Hark! the fire-bell is ringing.
2. Alas! I can see him no more.
 3. Dear me! the roof leaks.
 4. Hush! the baby is asleep.
 5. Hurrah! I have won.

— 文 章 —

(い) 主部と述部とを指摘せよ。

1. Fire burns. (火が燃える。)
2. Sparrows chirp. (雀が囀る。)
3. He is running. (彼は走つてゐる。)
4. Can you run? (君は走れるか。)
5. The song is loud and clear. (この歌は高く朗らかである。)

- [答] 1. "fire" = 主部。"burns" = 述部。
2. "sparrows" = 主部。"chirp" = 述部。
 3. "he" = 主部。"is running" = 述部。
 4. "you" = 主部。"can run" = 述部。

5. "song" = 主部 "is loud and clear" = 述部。

(ろ) 以下の誤を正し、正しき文となせ。

1. flowers bloom. (花が咲く。)
2. John reading. (ジョンは讀書してゐる。)
3. I a book see. (私は本を見る。)
4. In a tree birds are. (鳥が木にゐる。)
5. Your book lend me. (君の本を私に貸して下さい。)

[答] 1. Flowers bloom.

2. John is reading.

3. I see a book.

4. Birds are in a tree.

5. Lend me your book.

(は) 次の文中目的語を指摘せよ。

1. I have a book. (私は本を持つてゐる。)
2. Have you seen a lion? (君は獅子を見た事があるか。)
3. What are you doing? (君は何をしてゐるのか。)
4. My uncle reached Osaka yesterday.
(叔父は昨日大坂に着いた。)
5. The soldiers heard the music. They knew the tune.
(兵卒等はその音楽を聞いた。彼等は その曲を知つてゐた。)

[答] 1. "book." 2. "lion." 3. "what"

4. "Osaka." 5. "music;" "tune."

(に) 次の文中直接目的語・間接目的語を指摘せよ。

1. I will tell you an amusing story.
(僕は君に面白い話をしませう。)
2. He sent me some apples.
(彼は僕に林檎を送つてくれた。)
3. What have you given them?
(君はあの人達に何をやつたか。)
4. Whom do you teach English?
(君は誰に英語を教へますか。)
5. Wine will do you harm.
(酒は君に害になります。)

[答] 1. "you" = 間接。"story" = 直接。

2. "me" = 間接。"apples" = 直接。

3. "what" = 直接。"them" = 間接。

4. "whom" = 間接。"English" = 直接。

5. "you" = 間接。"harm" = 直接。

(ほ) 次の文中補語を指摘し、それが subjective なるか、objective なるかを述べよ。

1. He is a foreigner.
(彼は外國人である。)

2. I think him a foreigner.

(僕は彼を外国人と思ふ。)

3. He was made king.

彼は王にされた。

4. They made him king.

彼等は彼を王にした。

5. People believe him honest.

(世人は彼を正直だと信じてゐる。)

6. He worked hard, and soon got rich.

(彼は精出して働いて程なく金持になつた。)

7. He will make his son a sailor.

(彼は息子を船乗にするつもり。)

8. I named my dog "Rover."

(僕は僕の犬をローバと命名した。)

[答] 1. "foreigner"=subjective. 2. "foreigner"=objective. 3. "king"=subjective. 4. "king"=objective. 5. "honest"=objective. 6. "rich"=subjective. 7. "sailor"=objective. 8. "Rover"=objective.

(へ) 次の文中句及節を指摘せよ。

1. The Sumida flows into Tokyo Bay.

(隅田川は東京灣に注ぐ。)

2. I can not tell what it is.

(僕にはそれが何だか分らない。)

3. One who is trustful is trusted.

(信實である人物は人に信用される。)

4. Her father listened in silence, and, when she ceased, appeared thoughtfully

(彼女の父は黙つて聞いてゐたが、彼女が止めると考込へむ様子だつた。)

5. The servant who answered the door wore a strange look.

(取次に出た召使は怪訝な顔をした。)

6. I am learning how to use carpenters' tools.

(僕は大工道具の使ひ方を習つてゐる。)

7. My father said that a sailor's life was hard.

(私の父は海員生活は骨だと云つた。)

8. Did you go on foot?

(君は徒歩で行つたのか。)

[答] 1. into the sea = 句。 2. what it is = 節。

3. one who is trustful = 節。 4. in silence = 句。

5. who answered the door = 節。 6. how to ... tools =

句。 7. that ... hard = 節。 8. on foot = 句。

Plural (複数) に就て

(い)

(a) *A fox* is a cunning animal

= 狐は狡猾な動物だ。

(b) *Foxes* are cunning animals.

= 狐は狡猾な動物だ。

〔解 説〕

上に示した例は何れも一般のことを云ふので、(a)の“a fox”としたのは何も数を一匹と限る譯ではなく、「狐はどれでも」と單數を以て一般を言表はしたに過ぎない。

(b)は(a)と同じ意味のことを複數を用ひて言表はしたので、「狐はどれでも皆」と言ふ意味で定數の觀念が無い。斯かる複數を「不定複數」と名づけ冠詞も“some”も附けない。

(ろ)

(a) I want *a book*.

= 本が〔一冊〕欲しい。

(b) I want *some pens*.

= ペンが〔二三本〕欲しい。

〔解 説〕

(a)の“a book”は数を一冊と限つたのである。即ち“one book”の軽い意味であるから、是れが複數となれば“two books”“three books”となる筈であるが定數を言はない場合は數に限りがあると言ふ意味で、漠然と“some”「若干の」を附ける。斯かる複數を有限複數と名づける。

“I have”“There are”“Give me”“I want”など言へば「所持してゐるもの」「欲しいもの」等に數量に限度がある事は常識で考へてもわかる。斯かる語の後には有限複數を用ひねばならない。

有限複數に附ける“some”は一種の冠詞の様なもので一々邦語に譯さないでよい。

疑問文、否定文等に於ては“some”の代りに“any”が用ひられる。

Do you want *any pencils*? 〔疑 問〕

= 君は鉛筆が要りますか。

I want *some pens*. 〔肯 定〕

=私はペンが要ります。

I don't want any pencils. [否定]

=私は鉛筆は要りません。

(は)

(a) He has no father.

=彼は父親が無い。

(b) He has no friends.

=彼は友人が無い。

[解説]

「……が無い」と云ふ場合には“no”を用ひることは諸君御承知の通りであるが、“no”は単数複数何れにも用ひられる。學生から何故(a)を単数にし(b)を複数にするかと云ふ質問を受けることが屢あるが、それは斯う覚えてゐたらよい。

父親を二人持つてゐる人は無いのであるから(a)の場合は“fathers”と複数にせず

友人は大抵二人以上あるのが普通だから“friends”と複数にするのである。

He has no wife.

=彼は妻がない。

He has no children.

=彼は子供がない。

Gender 性

(い)

文法では男女の性の別を“Gender”「性」と言ふ。英語には四種の性がある。

I Masculine Gener (男性) 男性を表はすもの。

E King (王) father (父) lion (牡獅子)

II Feminine Gener (女性) 女性を表はすもの。

queen (女王) mother (母) lioness (牝獅子)

III Common Gener (通性) 男女両性に共通なるもの。

Parents (親) child (子供) student (學生)

IV Neuter Gener (無性) 男女の性なきもの

tree (木) stone (石) box (箱)

(ろ)

性の區別を表はすには次の四つの方法がある。

(a) 全く別な語を以て性を表はすもの。

man 男 — woman (女)

boy (少年) — girl (少女)

papa (おとうちゃん) — mamma (おかあちゃん)

son (息子) — daughter (息女)

husband (夫) — wife (妻)

(b) 男性名詞に接尾語 “ess” を附加して女性を表はすもの。

emperor (皇帝) — empress (皇后)

prince (皇子) — princess (王女)

actor (俳優) — actress (女優)

tiger (牡虎) — tigress (牝虎)

(c) 女性名詞に接尾語を附加して男性を表はすもの。

widow (寡婦) — widower (鰥夫)

bride (花嫁) — bridegroom (花婿)

(d) 通性名詞に性を表す言語を附加するもの。

he-goat (牡山羊) — she-goat (牝山羊)

peacock (雄孔雀) — peahen (雌孔雀)

male cousin (従兄弟) — female cousin (従姉妹)

boy student (男生徒) — girl student (女生徒)

man servant (下男) — maid servant (下女)

性に關する注意

(い)

動物の雌雄共通の事を述べる場合には通例男性を以

て全體を代表させるのである。

Man is mortal.

=人は死すべきもの。

と言へば “man” の中には “woman” をも含んで居り

The horse is a useful animal.

=馬は有用な動物である。

と言へば “horse” の中に “mare” [牝馬] をも含んでゐる。

注意 雄よりも雌の方が有用な動物は雌を以て全體を代表させる。

A cow has two horns.

=牛は角が二本ある。

(ろ)

(1) 男性名詞を受ける代名詞は “he”, 女性名詞を受ける代名詞は “she” であることは勿論であるが、動物などは性の明瞭な場合にも無差別に “it” で受けてもよい。

A fox caught a hen, and killed it.

=狐が牝鶏を捕へて殺した。

注意 主要なる話題となつてゐる場合は “he” “she”

で受ける。

(2) “parent” “student” 等の通性名詞の性は其場合次第で男女何れにもなるから、其場合に應じて“he”か“she”か決定する。

My cousin loves her baby.

= 従姉は赤坊を可愛がる。

(3) 船は女性として取扱ふ。

She sank off the coast of Boshu.

= 其船は房州沖で沈んだ。

(4) 國名は地理上から見た場合は“it”で國家として見た場合は女性に扱ふのが普通である。

Absolute Possessive Forms (獨立所有形)

(a) This is my book.

= これは僕の本だ。

(b) This book is mine.

= この本は僕のだ。

〔解 説〕

(a) の“my”は普通の所有格で、形容詞的に名詞“book”に附けて所有を示してゐるが、(b) の“mine”は「獨立所有形」と言つて、「所有格+名詞」即ち“my

book”と同じ意味である。mine の後へ更に名詞を付けてはならない。同一の名詞の反復を避けんが爲に用ひるのである。

獨立所有形は單數複數兩方の意味に用ひられる。

This book is mine [單 數]

Those books are mine [複 數]

人稱數に依る變化は次の如し。

一人稱 二人稱 三人稱

{	單	mine	yours	his, hers
	複	ours	yours	theirs

尙「私は友人と其處へ行きました」と云ふ文を英語に譯して

I went there with my friend.

とすれば此の“my friend”は誰と定まつた人を言ふか自分には友は他にない事になる。其處で「一友人」「或る友人」の意味と一度の場合は如何すればよいか。“a my friend”とか“my a friend”とは言はれない。何となれば“my”は定冠詞に代るべきものである。そこで「私の」を後へ廻して

I went there with a friend of mine.

とするのである。だから a friend of mine = one of my

friends の意である。

Reflexive Pronoun 再歸代名詞

- (a) He killed her.
=彼は其の女を殺した。
- (b) He killed *himself*.
=彼は自殺した。

〔解 説〕

(a) に於ては「殺した人」即ち動作を加へた者は He で「殺された人」即ち動作を受けた者は “she” で各別々の人である。「人を殺す」ならそれでいゝが「自殺をする」場合は「殺す」といふ動作を爲す者と、動作を受ける者と同一人である。自分の動作を自分で受けたと言ふ事を表はすには (b) の如く *-self* の形を使ふ

“*-self*” の附いた形を再歸代名詞と云ひ次の如き形がある。

	單 數	複 數			
一人稱	myself	ourselves			
二人稱	yourself	yourselves			
三人稱	<table border="0"> <tr><td>himself</td></tr> <tr><td>herself</td></tr> <tr><td>itself</td></tr> </table>	himself	herself	itself	themselves
himself					
herself					
itself					

主格, 目的格同形である。

注意 He did it *himself*.

=彼は自分でやつたのだ。

此場合の “*himself*” は他人にやつて貰つたのではない「自分でやつたのだ」と意味を強める爲に使つたのである。

- (a) This is *his own* house.
=これは彼〔所有〕の家だ。
- (b) He has a house of *his own*.
=彼は自分〔所有〕の家がある。

〔解 説〕

所有の意味を明かにする爲代名詞の所有格の次に, “*own*” を加へる。(a) に於て單に “*his house*” と言へば「自己所有の家」であるか「借家」であるか不明であるから, 借家でない自分の家と意味を明かにせんが爲 “*his own house*” といふのである。

ところが「自分の家がある」と云ふ場合には “He has *his own house*”. とは言はないで (b) の如く云はなければならぬ。

何となれば「彼は家がある」なら

He has a house

「自分の家」があるなら “his own” を附加へればよいが “own” には “a” も “no” も附かないので, “a friend of mine” と同様に “a house of his own” とするのである。

He has no house of his own.

=彼は自分の家が無い。

Dependent Interrogative 附屬疑問詞

(い)

(a) Who is he ?

=あれは誰ですか。

(b) I don't know who he is.

=あれは誰だか知りません。

〔解 説〕

(a) に於ては “who” は普通の疑問詞で、文章は單文である。(b) は名詞の役をしてゐる從屬節 “who he is” が主節の動詞 “know” の目的となつてゐる複合文で「彼は誰だか知らない」と云ふ意味である。

斯の如く Noun clause (名詞節) を導く爲に用ひられ

た疑問節を附屬疑問節と言ふ。附屬疑問節に於ける語の配列の順序は疑問文の順序に依らない。

(ろ)

(a) Do you know who he is ?

=あの人は誰だか御存知ですか。

(b) Who do you think he is ?

あの人は誰だと思ひますか。

〔解 説〕

疑問文には

- 1 助動詞や “have” “be” 等で始まるもの、
- 2 疑問詞で始まるもの、

と二つある。前者は “Yes” “No” で答へられる性質のもの、後者は “Yes” “No” では答へられない性質のものである。

「彼は誰か知つてゐますか」と言ふならば “Yes” “No” で答へられるから (a) の如く助動詞で始め Do you know who he is? としよいか、

「彼は誰だと思ひますか」ならば “yes” “no” では答へられないから (b) の如く疑問詞を以て始め Who do you think he is? としなければならぬ。

think? 「思ひますか」に類する語の疑問文は總て“yes”
“no”で答へられないから附屬疑問節を前に置く。

Indefinite Interrogative Pronouns

不定疑問代名詞

- | |
|---|
| (a) Do you want <i>anything</i> ?
= 君は何か要るか。 |
| (b) <i>What</i> do you want ?
= 君は何が要るか。 |

〔解説〕

What “who” 等が普通の疑問詞なるに對し “any” を不定疑問詞といふ。(a) は不定疑問詞の用例で何か「要るものがあるか」それとも「何も欲しいものが無いか」を尋ねてゐるのである。

それに対して (b) は何か欲しい事はわかつてゐて、其ものが「何であるか」を尋ねてゐるので、答は欲しいものの名を答ふべきである。

- | | |
|---|------|
| {
H.s <i>anybody</i> come?
= 誰か来たか。
{
<i>Who</i> has come?
= 誰が来たのか。 | [不定] |
| | [普通] |

- | | |
|--|--|
| {
Have you read <i>any</i> of these books? [不定]
= 此本の中どれか讀んだか。
{
Which of these have you read? [普通]
= どの本を讀んだか。 | |
| | |

不定疑問詞には any の外に “either” もある。

- | | |
|--|--|
| {
Do you want <i>either</i> of the two? [不定]
= 二つの中どれか欲しいか。
{
Which of the two do you want? [普通]
どちらが欲しいのか。 | |
| | |

Relative Pronoun 關係代名詞

(い)

限定的及追叙的用法

- | |
|---|
| (a) I met the friend who had told
me the news.
= 僕は其報を告げた友に逢つた。 |
| (b) I met a friend, who told me the news.
= 僕は一人の友に逢つた、すると
其友は僕に其報を告げた。 |

〔解説〕

関係代名詞には二つの異つた用法がある

I Restrictive Use (限定的用法)

例文 (a) に於ける “who had told me the news” は先行詞 “friend” の意味を修飾する形容節で、逢つた友は誰でも構はぬ譯ではない、「報を告げた友」と friend の適用を制限してゐる。斯の如き用法を限定的用法といふ。

此處で “had told” と大過去にしてあるのは「報を告げた」と言ふ動作が「逢つた」と言ふ動作より前に起つた動作でありながら “met” より後に書いてあるからで、且つ「報を告げた友と」言へば友は誰か確定するから定冠詞 “the” を附したのである。

II Continuative Use 追叙的用法

(b) は I met a friend, and he told me the news の如く接續詞と代名詞に書替へることが出来る。

此場合 “who told me the news” は別に先行詞 “friend” の適用を制限するものでなく、邦譯するにも (a) の如く「……する處の」と逆に溯ることなしに上から真直に譯すので、“who” の前に comma を置くのが普通。

要するに此文は I met a friend.

He told me the news.

なる二文を関係代名詞で結合したに過ぎぬ。即ち文全體は二つの獨立節から成る集合文である。

(ろ) Omission of the Relative

関係代名詞の省略

- | |
|--|
| (a) The man [whom] I met yesterday
= 僕が昨日逢つた人 |
| (b) The book [which] I am reading
= 僕が讀んでゐる本 |
| (c) He is the tallest man [that] I ever saw.
= 僕が今迄見た中で彼が一番丈
が高い |

[解 説]

限定関係代名詞が動詞或は前置詞の目的語である場合は、隨意に之を省略することが出来る。殊に談話の際には略するのが普通である。但し関係詞を省略した場合前置詞は本來の位置である動詞の次に來なければならぬ。

上に示した文例中の関係代名詞はそれぞれ(a) 'met' (b) "am reading" (c) "s.w" の目的語であるから略してもよいのである。

関係代名詞が Nominative The (主格) の場合には省くことが出来ないのが通側である。

それは The book *which* is interesting.

=面白い本。

に於て *which* を略すならば

The book is interesting.

=その本は面白い。

と區別がつかなくなる。who があつて初めて "is interesting" が "The book" を修飾する事が明瞭である。

(は) What

(a) Do you understand *what* I say?

=君は僕の言ふことがわかるか。

(b) I know *what* you want.

=僕は君の欲しいものを知つてゐる。

〔解説〕

"what" は其自身先行詞を兼ねた関係代名詞であつて場合次第で "that which" "the thing which" 等種々

の意味になる。

(a) に於ては "what=that which" で "that" なる先行詞と "which" なる関係代名詞を兼ねて居り、「僕の言ふところの事、僕の言ふ事」となる。

(b) の "what" は "the thing which" で「君の欲しいところのもの、君の欲しいもの」となる。

比較

What do you want?

〔疑問代名詞〕

=君は何が欲しいか。

I know *what* you want.

=僕は君が何を欲しいか、君の欲しいものを知つてゐる。

I will give you *what* you want.

〔関係代名詞〕

=君の欲しいものを上げやう。

形容詞の位置

二つ以上の形容詞が一つの名詞を修飾する場合には其順序を如何すべきか。名詞の前に次の順序に配列するのが普通である。

1 冠詞

代名詞の所有格 my, your 等

代名形容詞 this, that 等

II 數量を表はす形容詞

III 性質を表はす形容詞

性質を表はす形容詞に種々ある場合は、意見一大
小一新舊一形状一色彩一材料、等の如く外觀の形
容から其物の實質の形容へ進んで行く順序に並ん
るのである。

例へば

Those three young ladies.

=あの三人のお嬢さん達。

My new gold watch.

=私の今度買った金時計。

Those two large round tables.

=あの二つの大きな圓い卓子。

The most useful little animal.

=最も有用な小動物。

短かい修飾語は名詞の前に置くが、長い修飾文句にな

ると名詞の次に置く。

A loss too heavy to be borne. [不定法]

=重くて耐へ切れない損害。

A thing of great use. [形容句]

=非常に有用な物。

Money which I can spare. [形容節]

=要らぬ金、遊んでゐる金。

Multiplicative Numerals

倍 數 詞

(a) I bought at *half* the usual price.

=普通の値段の半分で買った。

(b) He offered me *double* the sum.

=彼は其額の二倍出さうと言つた。

〔解 説〕

“half” 半分 “double” 二倍 “treble” 三倍等、倍數
を表はす語を倍數詞と云ふ。

“half” は half an hour” の如く “a” に先立つけれ
ども、時に依ると “a full half hour” 「丸半時間」の如
く冠詞の後に來ることもある。

猶倍數詞には次の如きものもある

once = one time 一 倍

twice = two times 二 倍

thrice = three times 三 倍

four times 四 倍

five times 五倍 以下同様。

用法は

He is *twice* as old as you.

= He is *twice* your own age.

=彼は君の二倍の年長だ。

現在のことに就て

(い)

(a) I *go* to school.

=僕は學生です。

(b) I *am going* to school.

=僕は學校へ行く途中です。

〔解説〕

今現に進行中の動作「今現に……してゐる所だ」と云ふことを表はすには (b) の如く進行形現在 (be + 分詞) を用ひるのである。現在を用ひては誤である。

現在の Tense (時制) は現に進行中の動作を表はさず、不易の眞理や現在の状態習慣等を表はすのである。そこで (a) は習慣的動作を表はすので、自分が今讀書中であらうが、活動寫眞を見てゐるやうが、そんな事には關係なく、自分は「毎日學校へ行く」「學生である」

と言ふ意味である。

Two and two *make* four. [眞理]

=二に二を加へると四になる。

He *works* hard. [習慣]

=彼は勉強家だ。

He *is* ill. [現在の状態]

=彼は病氣だ。

但し動作が説明に伴ふ場合や、眼前に起つてゐる事を述べる場合は現在を用ひる

I stand up — I walk to the door.

=立ちます——入口の方へ歩いて行きます。

Here he comes.

=やああの人がやつて来る。

(ろ)

(a) I *am going* to school.

=僕は今學校へ行く途中です。

(b) He *is going* to America next month.

=彼は來月米國へ行きます。

(c) What *are* you *going* to do?

=何をしようとしてゐるのか。

〔解説〕

“Go” の進行形に三つの意味がある。

1. (a) の如く現に行くといふ動作が行はれつゝある事を示す場合。
2. (b) の如く未来を表はし「行く積り」「行きます」の意味を表す場合。
3. (c) の如く一種の助動詞となり「行く」意味は全然なく、「將に……せんとす」「……する積り」と未来に関する意志はす場合。

猶 (c) の例を示すならば

I am going to write a letter.

＝僕はこれから手紙を書く積りだ。

I am going to study.

僕はこれから勉強するつもりだ。

注意すべき形容詞代名詞

い

(a) *Have you a knife?*

＝君ナイフを持っていますか。

Yes, I have one.

＝えゝ持っています。

(b) *Do you want this knife?*

＝君はこのナイフが欲しいか

Yes, I want it.

＝えゝ欲しいです

〔解説〕

“it” は特定のものを指す単数名詞を受けるので (the + 単数名詞) の意味であるから (a) の如く、どのナイフとも確定してゐないものと言つてゐる場合に “Yes, I want it.” と返答すれば誤で (a + 単数名詞) の意味を表はす “one” を用ひねばならない。

(b) の場合は「此のナイフ」と特定のものを言つてゐるのだから、答に “it” を用ひる。

但し *He bought a knife, and gave it to me.*

＝彼はナイフ買つて、それを私に呉れた。

に於ては “a knife” は彼が買つたナイフで特定のものだから “it” で受ける。

猶 “one” は形容詞が附く時は不定冠詞も取り複数にもなる。

a very good one = 大層いゝの

some large ones = 大きいもの

(ろ)

(a) Lend me *some books*.

=二本を(二三冊)貸して呉れ給へ。

(b) Lend me *some novel*.

=何か小説を貸して呉れ給へ。

〔解説〕

“some” は複数普通名詞に用ゐて (a) に於けるが如く「若干」の意味を表はすことは既に述べたが、(b) に於けるが如く単数普通名詞の前に来ると不定の意味となり「何か」「誰か」「何處か」と譯すのである。

There is *someone* at the door.

=誰か玄関に来てゐる。

It must be *some* mistake.

=何かの間違に違いない。

不定の意味を表はす “some” も疑問文否定文では “any” に代る。これは不定疑問詞の項で説明したから此處では單に例だけ示して置く。

Do you want *anything* ?

=君は何か欲しいのか。

I don't want *anything*.

=僕は何も要らぬ。

(は)

(a) He was reading *some* English novel.

=彼は何だか英語の小説を讀んでゐた。

(b) I am now reading *a certain* novel.

=僕は今或る小説を讀んでゐる。

〔解説〕

(a) の “some” は単数普通名詞に伴つてゐるから、「何か」と譯すべきもので、話手自身が其ものの何たるかを瞭り知らないのである。(b) の “a certain” は日本語の「或る」に相當する語で、話手自身は其の何たるかは知つてゐるか、其名を特に言ふ必要がないか或は言ふを欲しない場合である。“some” を「或る」と譯すのは誤りであるから注意して置く。

(に)

(a) They help *each other*.=They help *each the other*.

=彼等はお互に相助け合ふ。

(b) They are kind to *one another*.

= They are kind *one to another*.

= 彼等は互に親切にする。

〔解 説〕

“each other” も “one another” も「お互に」と譯すが兩者の相違は如何 (a) の “each other” は “each the other” の約まつた形で, “each” 「各々が」 “the other” 「残りの一人, 即ち相手」を助ける意味で, 二人の場合にしか使はれない。(b) は三人以上の場合で “one” は「誰でも一人」 “another” は「残りの人々の中の一人」の意であるから三人以上の場合でなければ使はれないのが原則である。併し兩者を無差別に使ふ人もあると言ふことは知つて置くべきである。

(ほ)

The rich are not always happy.

= 富者必ずしも幸福ならず。

形容詞に定冠詞が附けば複數普通名詞の意味となる文例の “the rich” は “rich people” 「富有な人人」の意 “not always” は「必ずしも……とは限らぬ」意である。猶二三例を示せば

the poor = poor people 貧者

the learned = learned men 學者

the brave = brave men 勇者

(へ)

(a) *Everybody knows him.*

= 彼を知らぬ人無し。

(b) *Every man can not be a poet.*

= 詩人になれる人は滅多に無い。

(c) *He does not know anything.*

= 彼は何も知らない。

〔解 説〕

“every” は “all” 「全部, 皆」の強い意味で, 全部の中の一つ一つ取つて見ても例外は一つも無い。つまり「さうでないものは無い」と言ふ意味である。一つ一つ考へてそれを引くるめるのだから常に單數の扱を受ける。そこで (a) は「誰も彼も彼を知つてゐる」「彼を知らぬ者は無い」と言ふ強い意味である。

(b) は打消を伴つた場合で, 一寸と考へると全部を打消して「誰も彼も詩人になれない」「詩人になれる人は無い」意味になりさうだが, さうではない。これは

部分的の打消で「總てがさうだとは云ふ譯ではない」
即ち「さうなのは少い、滅多に無い」の意味である。

(c) は全部の打消である。“not any = no” だから
He knows nothing 「彼は何も知らない」といふ意味であ
る。

猶序ながら部分的の打消には次の如きものがある。

I have *not* read *all* these books.

=この本は皆読んでしまつた譯でない、
讀まぬものもある。

Both his parents are *not* living.

=兩親共存命と言ふのではない、
片親しか無い。

(と)

(a) There is *no* middle school in this town.

=此の町に中學校が無い。

(b) He is *not a* scholar.

=彼は學者ではない。

英語で「……が無い」は“no”で表はし「……に非
ず」は“not a”で表はすのが普通である。

He has *no* children.

=あの人は子供が無い。

The whale is *not a* fish.

=鯨は魚に非ず。

然るに打消の意味を強めんが爲に「……が無い」の場
合に“not a”を用ひ「……に非ず」の場合に“no”を
用ひることがある。

例へば

There was *not a* breath of wind.

=そよとの風も無かつた。

He is *no* scholar.

=彼は學者でも何でも無い。

(ち)

I *don't think* he will come.

=彼は來まいと思ふ。

〔解 説〕

日本語では「彼は來まいと思ふ」と來るを打消す。
英語でも“I think he will *not* come.”と言はない事もな
いが“think”の方を打消し「來るとは思はない」と云
ふ風に云ふのが普通である。

I *don't think* I can.

=僕には出来ぬと思ふ。

I don't think he is at home.

=彼は不在だと思ふ。

(リ)

(a) This is *as white as* snow.

=是れは雪の様に白い。

(b) This is *not so white as* snow.

=是れは雪程白くない。

〔解説〕

「……と同じ様に白い」「……程白い」と言ふ様な肯定文の比較には“*as……as*”を用ひるか、「……程白くない」と否定文の場合は“*not so……as*”を用ひる。「彼女は姉さんに劣らず器量がいゝ」なら肯定文であるから“*as……as*”を用ひて

She is as pretty as her sister.

とすればいゝが、「彼女は姉さん程美しくない、即ち器量が姉さん程でない」なら否定文故“*not so……so*”を用ひて

She is not so pretty as her sister

としなければならぬ。

(ぬ)

(a) He is *so foolish that* no one will keep company with him.

(b) He is *such a fool that* no one will keep company with him.

=彼はあまり馬鹿だから誰も交際する人が無い。

〔解説〕

“*so*”と“*such*”は何れも「あの様な」「その様な」と云ふ意味である。“*so……that*”と“*such……that*”も同義で、何れも結果を表はし、「其結果として……」の意味であるが“*so*”は副詞であるから次へ形容詞、副詞が來、*such*は形容詞であるから次へ來る語は名詞である。間違はない様に注意を要する。

“*so that…may*”は目的を表はす。次の例に就て比較會得せられ度い。

He works hard so that he may succeed. [目的]

=彼は成功せんが爲に勉強する。

He works so hard that he makes remarkable progress. [結果]

=彼は非常な勉強家だから進歩が早い。

(る)

The more he gets, the more he wants.

=とればとる程餘計は欲しがる。

〔解 説〕

“the + 比較級, the + 比較級の形は「……すればする程益」の意味である。詳しく言へば前の“the”は「すればする程, 其程度に應じて」の意味を表はす関係副詞で, 後の“the”は「それだけ」の意味の指摘副詞である。猶一二例を示すならば

The more, the better.

=多ければ多い程よい。

The sooner, the better.

=明ければ早い程よい。

Punctuation 句讀法

句讀法を英語で Punctuation と言ふ。比較的句讀法に重きを置かない日本語に於ても, 句切り方一つで文章が全然異つた意味になる事が屢ある。句讀法の複雑

な英語に於ては, 句讀點なしには文章は全く讀めないと言ふも過言ではあるまい。句讀點の打ち方は人に依つて多少違ふが, 大體は定つてゐるから, 讀む上に於ても書く上に上つても, 普通の法則だけは是非心得て置かねばならぬ。

句讀點の主なるものは

Comma	,
Semicolon	;
Colon	:
Period
Interrogation Mark	?
Exclamation Mark	!
Dash	—
Apostrophe	'
Hyphen	-
Quotation Marks	“ ”

Comma.

comma の用法は中々むづかしいが此處では極めて簡単に述べよう。

(a) 呼び掛けの語

Taro, come here. = 太郎, 此處へ來なさい。

(b) 同格の語句

Milton, *the great poet*, was blind.

=大詩人「ミルトン」は盲目であつた。

(c) 説明文句の前

The field is of long, 60 yards in length, 40 in breadth.

=其畑は長方形で、長さ六十「ヤード」幅四十「ヤード」ある。

(d) 文法上同一品詞に属する三つ以上の語句

Tom, Dick and Harry came to see me.

=トムとデックとハリが僕の處へ來た。

(e) 副詞句を文頭に置く場合

At last, he succeeded.

=終に彼は成功した。

(f) 文節 "therefore" など

文中に挿入した場合

This, *I think*, will serve the purpose

=これで間に合ふと思ふ。

This book, *therefore*, is not used.

=だから此本は使はれないのだ。

(g) 文詞構文 (但し其前の名詞を修飾するに止る分詞を除く)

The sun having set we all went home.

=陽が沈んだので皆歸宅した。

(h) 獨立不定法

To tell the truth, she is my intended.

=實を申せばあの女は僕の未來の妻だ。

(f) 語の省略された場合

He is in England, his wife, in Japan

=夫は英國、妻は日本 (is を略す)

(g) 集合文の各文節間に Comma を置く。但し兩文節

が極めて密接な場合は Comma を打たない。

He is not a scholar, but a writer.

=彼は學者ではなくて、文章家だ。

I made haste and caught him

=僕は急いで彼を掴へた。

(h) 名詞節形容節は普通 Comma で句切らないが、

副詞節は大抵の場合に Comma で主節とわける。

He will succeed, because he works hard.

=彼は勉強するから、成功するだらう。

注意 但し比較、時、仕方などの副詞節が文尾に

ある場合は Comma を打たぬ

He is one inch taller than I

=彼は僕より一時高い。

Send me word before you star

=御出発前にお言附下さい

(i) “Yes” “No” 問投詞としての “Well” “Why”

などの次

数字の句切。

Colon.

Semicolon. では足りず、と言つて文脈の連絡上 Period
で切つてしまひ度くもなしと言ふ場合に使ふのである

Your horse is white; mine is black.

=君の馬は白いし、僕のは黒い。

Colon

Semicolon では充分でないと思ふ場合に使ふ。其用法
は(1)理由を示す文節の前、(2)例證説明文句、時
とすると引用文の前に用ひるが、(2)(3)の場合には
—Dash を Colon の次に置く。

Period.

(a) 平叙文、命令文の終。

I am a Japanese.

=僕は日本人だ。

Come in.

=おはいり。

(b) 略字。

1492 A. D.

=西歴千四九十二年

anno Domini の略

(c) 署名、日附、羅馬数字の次

John Brown.

Sunday, April 29, 1934.

George V.

Interrogation Mark.

疑問文、半疑問文の終。

Do you like coffe?

=コーヒーがお好きですか。

You like coffee, I suppose?

=君コーヒーがお好きでせうね。

Exclamation Mark.

感嘆文、強い感情を表はす場合、時とすると命令文
にも使ふ

What a tall man!

=何といふ丈高だらう。

Come in! =まあ入れと言ふに

Dash

人に話を話を庶られた場合、言ひかけたことを途中で止めて他の文句に移る場合、言ひ淀む場合、説明的文句を挿入する場合、意味を強める爲に語を繰返す場合等に用ひる。

Apostrophe.

名詞の所有格、文字の省畫等に用ひる。

Saito's dictionary.

= 齋藤の辭書。

don't = do not

I'll = I will

Hyphen.

語を音節に分ける場合、複合詞等に用ひる。

in-tro-duc-tion 初歩

steam-engine 蒸氣機關

Quotation Marks

直説叙法の被城道部分、引用語句、新聞、船舶等の名の前後を Quotation Marks で圍む。

"Won't you go?" said he.

= 行きませんかと言つた。

The "Asahi" = 朝日新聞

The "Mikasa" = 三笠艦

昭和九年五月卅一日 印刷
昭和九年六月五日 發行

著作権



複製
不許

(定價金壹圓也)

初等英文法の王道

著者 鈴木芳松

發行者 坂井國三郎
東京市神田區神保町二丁目四番地

印刷人 太田米吉
東京市神田區錦町三丁目五番地

印刷所 太田印刷所
東京市神田區龜町三丁目五番地

東京市神田區神保町二ノ四

發行所 學朋社書店

電話九段(33)三五七二番
振替東京四四一二九番

東京市神田區神保町一ノ一

發賣所 上田屋書店

電話神田(25)三五五八番
振替東京三〇八六番